論文

近江地域北部の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年

―器台形土器を中心とした検討―

山下　優介

要旨

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて特徴的な考古事象が集中する近江地域において、当時、どのような社会変化が生じたかという問題は、地域史的な疑問に止まらず、汎列島的な時代変化の背景を理解するために重大な問題である。しかしながら、近年の研究動向をみても、近江地域内部に存在する遺跡の性格や周辺地域との交流関係など、基本的な評価が定まっていない状況がある。特に、近江地域北部に関しては、特徴的な事象の中心である湖南地域と周辺を結ぶ重要地域でありながら、近年の成果をふまえた土器編年の再検討といった基礎的な研究が十分におこなわれていない。この地域を対象とする土器の編年研究を難しくした要因は、時期区分の基準となる器種がとらえにくいことであったが、従来から近江地域の特色と理解されてきた器台形土器に注目することで、近江地域北部の土器編年を再検討できると考えた。

本稿の目的は、近江地域を周辺地域と比較して正確に評価するために必要な、近江地域北部の土器編年案を提示することである。分析は、１．資料集成、２．土器の形式分類、３．器台形土器の型式学的変化の把握、４．共伴器種の消長関係検討、５．各段階設定、６．先行研究との併行関係検討、７．土器編年上の画期に関する考察、という手順で進めた。分析の結果、器台形土器の型式学的な変化に基づいて対象時期を９時期に区分したうえで、そのほかの器種を含む各時期の土器構成を明らかにした。従来、近江地域北部を対象とした研究では、独自の編年観が確立していなかったために他地域の編年を借用せざるを得ない場合が多かったが、本稿の成果により、近江地域北部の指標に基づいて具体的な時期を決めることが可能となった。また、土器編年上の大きな変化を認めたⅤ期とⅥ期の画期は、周辺地域との連動性が考えられ、その変化をどのように評価するかが今後の課題となる。

１．はじめに

琵琶湖をとりまく近江地域は、いつの時代も活発な湖上交通によって文物が往来する、結節点としての役割を担ってきた。特に、本稿の対象時期である弥生時代後期から古墳時代前期には、他地域にはみられない独自の考古学的事象が集中する地域として注目される。守山市伊勢遺跡の独立棟持柱建物群や、野洲市大岩山銅鐸として知られる銅鐸の多数埋納例、あるいは湖岸各地にみられる出現期の前方後方墳などは、その代表例といえる。

交通の要衝としての側面と、強い独自性にみられる地域的な側面という、一見相反するようにもみえるこの二つの要素が混在する当時の近江地域では、どのような社会が営まれていたのであろうか。人やモノ、あるいは情報の移動規模が格段に広域化、大規模化する弥生・古墳時代移行期の社会変化を明らかにするために、近江地域に生じた特異な現象の数々の要因を読み解く作業が重要と考えられる。

近年には森岡秀人が、近江地域南部を中核とする「原倭国」という概念の提起[1]など、近江地域に注目した刷新的な発言（森岡 2015）をおこない、いよいよ近江地域を抜きにして当該期の社会変化に関する議論ができない状況になったといえるだろう。しかし、このような研究動向のなか、近江地域内部に存在する遺跡の性格や、周辺地域との交流関係といった基礎的な情報がきわめて不明瞭であることは、今後、他地域との関係性などを積極的に検討するうえで致命的な問題といえる。例えば、近畿地方を中心とした西日本各地を対象として、弥生時代中期から古墳時代中期にわたって長期的に集落動態を分析した取り組みのなかでも、近江地域北部に関しては分析が保留されている（古代学研究会編 2016）。

今後、議論の中心である近江地域南部と、周辺各地との関係性を時期別に検討していくうえで、日本海側地域や濃尾平野などの重要地域への、ルート上にあたる近江北部の動向を把握することが重要である。弥生・古墳時代移行期の列島各地の変化をより連動的に理解していくために、本稿はその初歩となる時間軸の設定および精査をおこなう。

２．先行研究と問題意識

２－１．近江地域における当該期の土器編年研究

近江地域における当該期の土器編年研究は、第一

に、近江独自の形式として理解される受口状口縁甕[2]の時期的変遷を編年の指標とする視点（中西 1979）にもとづいて実施されてきた。受口甕を基軸とした在来の器種や形式の変化や、消長を重視しておこなった編年案（伴野 2006 など）は、第一の視点に基づく代表的な成果として知られる。

第二に、器種構成の全体を見渡し、各形式の消長関係に基いて編年をおこなう方法が採られてきた（兼保 1990 など）。滋賀県内の発掘調査報告書等では、琵琶湖沿岸の各地域を対象とする編年案が、この手法によって提示されたが、第一の手法ではなく、器種組成ががより重視された背景には、受口甕の地域差による問題が存在する。

受口甕などの甕形土器は、煮沸具として日常的に使用されたと考えられるため、時期的な変化を反映しやすく、編年の指標として採用されやすい。一方で、弥生時代後期の近江地域の甕は装飾性に富み、各小地域の個性が大きく反映されることが知られている（近藤 2001）。各地域で甕の特色を把握し、変遷を追いかける作業が編年のためには最適だが、以下の二点を理由としてそれが困難な状況がある。

一つは、湖を介した交流の結果として地域的な属性が混じり合い、折衷的な属性をもつ甕が多く存在することである。もう一つは、施文の省略等が頻繁におこなわれるため、文様パターン等に基づく地域色の判断は代表的な傾向を抽出するためには有用であるが、編年の指標としては不適切な部分が多いということである。このような状況を踏まえて、甕に対する施文を積極的に取り入れる湖南地域以外の地域では、近江地域独自の形式よりもむしろ、器種構成全体における各形式の消長関係が重視される傾向にある。

本稿で対象とする近江地域北部も、各報告書のなかで各形式の消長に基づく変遷案が示されてきた（小竹森 1993，宮崎 1994 など）。なかでも宮崎幹也による研究は、対象地域の出土土器群の年代的位置づけを、近畿地方や東海地方の代表的な編年案と対照させて論じたもので、後述する中居和志の編年案（中居 2010）が発表される以前に引用されることの多い成果である。

宮崎は、近江町[3]内の遺跡出土資料にほぼ限り、方形周溝墓出土土器を中心に、同一遺構出土品を用いて変遷観を示した。設定時期ごとにその小時期を代表する器種を紹介し、その特徴について説明を加えている。赤塚次郎による廻間編年（赤塚 1990）および、石野博信と関川尚功による纒向編年（関川 1976）との併行関係にふれている点も、重要な取り組みといえる。

同じ頃の成果である植田文雄による編年案は、湖東地域の東近江市に所在する斗西遺跡の資料を中心とし

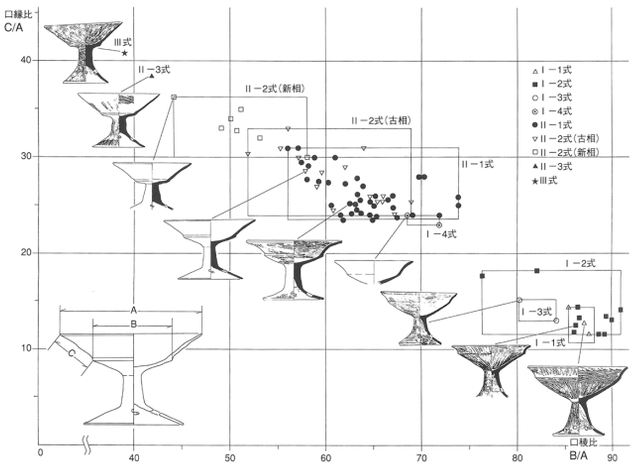

図１　有稜高杯にみられる口稜比と口縁比の変化

て、古墳時代を通じた時間軸を設定しようとする試みである（植田 1994）。植田は斗西遺跡の資料を基軸として古墳時代を 12 の土器様式に区分し、それらに対応する近江地域内の各小地域の基準資料を挙げることで、近江全域を視野に入れた時間軸の構築を目指した。

また、編年作業上の有効な指標となる、形態的あるいは技法的な特徴を論じているほか、既往の編年との対応関係や暦年代を示している。さらに、設定した土器様式における画期と近江地域の集落の動向を対照して考察を深めている点など、土器の分析から集落までを見据えた総合的な論考と評価できる。

滋賀県内では、その後も新たな調査によって資料が増加し続けてきたが、1990 年代後半から 2000 年代にかけては、新資料を用いた編年研究は湖南地域を除いて多くない。その理由には、90 年代前半までに、近江地域内各地の概要が示されたことに加えて、隣接する地域で相次いで代表的な編年が確立された状況があるだろう。

湖岸の各小地域は、それぞれが近畿地方や東海地方西部、北陸地方と接し、各小地域の土器には濃密な交流関係の痕跡が表れる。そのため、周辺地域と共有する器種の年代観は、概ね把握が可能であり、近江地域の遺構や遺跡の時期判断に必要な年代的指標の大枠は、他地域の編年が整理されることで示されてきた。近江地域の地理的な特異性は、研究史上でも影響を与えていることがうかがえる。

近江地域を対象とした土器編年研究は以上のような経過を辿ってきたが、近年、方法論の見直しともに研究の進展がみられた（中居 2010）。これは、刷新が進む周辺地域の編年案との対応関係を見直すとともに、さらに増加した資料をふまえた近江地域全域で通用する編年案を示そうという試みである。また、先行研究で十分に論証されなかった時期決定の根拠となる編年の基軸を明確に示したという点に関して、画期的

な研究例と評価できる。

中居は、大阪府下田遺跡出土資料などを対象に実践された、有稜高杯の変化を数値化して分類を行う研究（図１）を参考に、近江地域における当該期の高杯を対象として同様な分析をおこなった。その分析結果とあわせて、一括性を重視した資料を用いることで、十分に議論されてこなかった近江地域全域の土器編年と周辺地域との併行関係を示した。

しかし、近江地域の場合には、高杯を編年の基軸とすることに若干の難しさが伴うのではないだろうか。上に述べた地理的環境を理由として、各小地域では、隣接地域に由来する複数形式の高杯が混在する。その採用状況は、時に遺跡単位で異なることもある。

実際に、近江北部地域においては、湖西地域でおもに近畿地方と共通した形式が採用されるのに対して、湖北地域は濃尾地域と共通するといった差異が認められる。そのため、両地域にみられる高杯の時期的な併行関係の整理が必要であり、編年の指標となる一貫した型式学的変化を示す器種とは認めがたい。したがって本稿では、近江地域独自の器種として過去にも注目された、器台形土器を対象に再び検討をおこなう。

２－２．近江地域の器台形土器

『彦根市史』で佐原真がいちはやく指摘して以来、弥生後期の近江地域では器台形土器に関しても甕形土器と同様に独自性が存在することが知られている。佐原は、「後期には器台形土器とよばれ、壺形土器の台として用いられたと考えられる土器の発達が滋賀県の弥生式土器の一特色をなしている」（佐原 1960：pp.107）と述べる。

また、「畿内的な様式に統一されて行くこの段階の弥生式土器にあって、ここには畿内にも東海にもただちに比較しうるものがみられないということ、即ちこの地方独特の器形であるということは特筆に値する」（佐原 1960：pp.107）として、器台にみられる近江地域の独自性を強調した。

その後、小竹森直子は、弥生時代後期後葉から庄内式期にかけての山城や河内、大和地域などの周辺地域で器台の使用が低調であることと対照的に、近江地域では主要器種であること論じている。さらに、庄内式期に出現する「小形器台[4)]」に関して、近江地域では在来の器種が小型化する傾向のなかから出現をとらえることが可能であると説明している（小竹森 1988）。

「小形器台」が出現する背景に関する問題は、十分な検討や論証のための手続きが必要となるが、この論考の重要な点は、器台形土器が近江地域における土器編年の指標となりうる器種であることを示唆している点である。対象時期を通じて採用される器種かつ、連続的な形態変化が予想されている点は、先行研究における課題を解消し、近江地域の時間軸を設定するうえで相応しい対象といえる。

表１　分析対象遺跡一覧

遺跡番号	流域区分	遺跡名	文献番号
1	安曇川流域	南市東遺跡	1,2
2		正伝寺南遺跡	3
3		針江北・針江川北遺跡（Ⅰ）	4
4		針江川北（Ⅱ）遺跡・吉武城遺跡	5
5		森浜遺跡	6
6	石田川流域	弘川常盤遺跡	7
7		弘川Ｂ遺跡	8
8	余呉川流域 高時川流域	法光寺遺跡	9
9		桜内遺跡	10
10	姉川流域	十里町遺跡	11
11		国友遺跡	12
12		森前遺跡	12
13		越前塚遺跡	13,14
14		大塚遺跡	15,16
15		柿田遺跡	17
16		墓立遺跡	18
17		北郷里小遺跡	19
18		堀部西遺跡	20
19		大辰巳遺跡	21
20	天野川流域	法勝寺遺跡	22
21		黒田遺跡	23

２－３．本稿の目的

近江地域北部の土器編年研究は過去にも例があるが、筆者があらためて取り組む理由は、時間軸などの基礎的条件を整え、この地域の弥生時代後期から古墳時代前期における状況を、他地域と比較するためである。はじめに述べた近江地域に対する包括的な議論の必要に加え、近年の相次ぐ新発見を経て、近江北部自体も地域史を超えた視点から検討が求められている。

大韓民国慶尚南道金海市会峴里貝塚から見つかった、「近江北部を中心に分布する後期の近江系受口状口縁甕によく類似する」（武末他 2011：pp.108）甕形土器は、現状で最も東に系譜をもつ韓半島出土弥生系土器としてきわめて異例であり、その出自や流入の背景については積極的に論じられるべきである。

また、前方後方墳の出現や拡散の問題を理解するうえで重要な資料となることが予想される、高島市熊野本６号墳や長浜市小松古墳といった墳墓の存在など、所属時期等の検討を必要とする事例も多い。

これらの興味深い現象を研究資料として正しく位

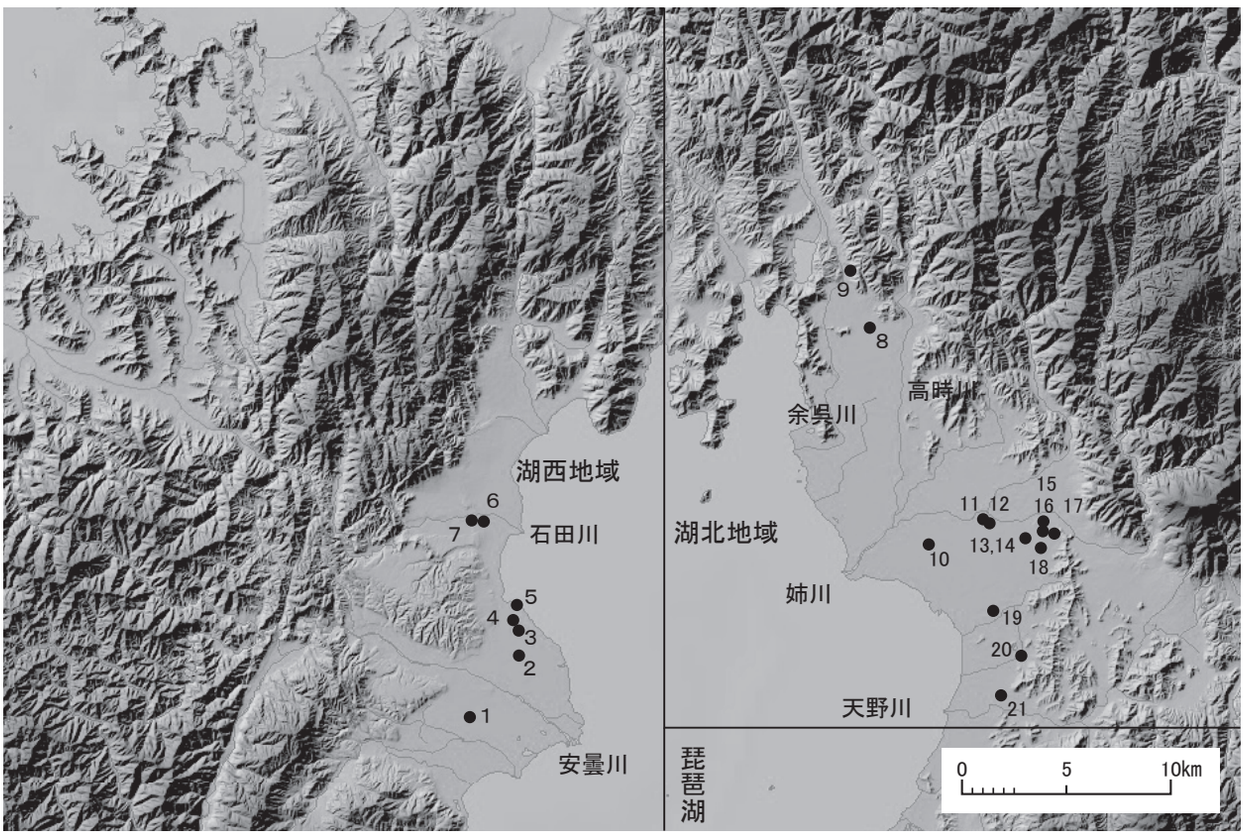

図２　対象遺跡分布

置づけ、今後の議論を進めるための基礎をなす、近江地域北部における弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年案を提示することが本稿の目的である。

編年においては、最新の成果をふまえた再構築に加え、分析方法に関する問題点の改善を試みる。その際、近江地域独自の器種と認められながら、具体的な検討の少なかった器台形土器に注目して分析を進め、在来系土器による安定的な編年案を示すことを目指す。

３．分析の対象と手順

対象時期について、便宜的に弥生時代後期から古墳時代前期と説明してきたが、『弥生土器の様式と編年：近畿編Ⅱ』における「近江第Ⅴ様式」（兼保 1990）から、『古式土師器の年代学』の「布留式新段階古相」（森岡・西村編 2006）までにおおむね該当する。

対象地域とした近江地域北部（以下：湖岸北半地域[5]）は、現在の行政区分における滋賀県の米原市、長浜市、高島市である。該当地域内の 21 の遺跡を対象として、出土の一括性が認められている土器群を選び分析をおこなった（表１，図２）

分析は、１.一括資料の集成、２．土器の形式分類、３．器台形土器にみられる型式学的変遷の把握、４．共伴する形式の消長関係の整理、５．各段階設定、６．隣接地域の編年案との併行関係の検討、７．土器編年上の画期とその背景に関する考察、という手順に沿って進めた。

具体的な編年作業にあたっては、まず、対象時期に安定的に存在するうえに、他器種に比べて明確な型式変化を示す、器台形土器を対象に分析をおこなった。次に、遺構における共伴関係に基づいて他形式を含む組列を検討し、器台の変化に対応する各段階を設定した。最後に、先行研究との比較などもふまえて、各段階の時期関係を総合的に判断した。

４．分析結果

４－１．土器の分類

集成した土器群を対象に、壺類、甕類、高杯類、器台類、鉢類の五大別を用意し、既存の分類案を参考にしながら、各類をさらに形式概念によって細分した[6]。説明にあたって使用した語句と部位の対応関係は図３のとおりである。

他地域の編年案で指標とされることの多い壺や甕類は、口縁端部の整形技法や胴部の形態、施文パターンなどにみられる特徴が明瞭であり、細分が可能である。しかし、本稿の分析対象には個体の全体像が把握できるような資料が多くなく、細分した場合、該当する資料が少量となることが予想された。

また、甕類にみられる属性の変化に対しては、先に述べた理由等により、単純に時期差ととらえることは難しいと考えた。周辺地域からの影響を強く受けた甕

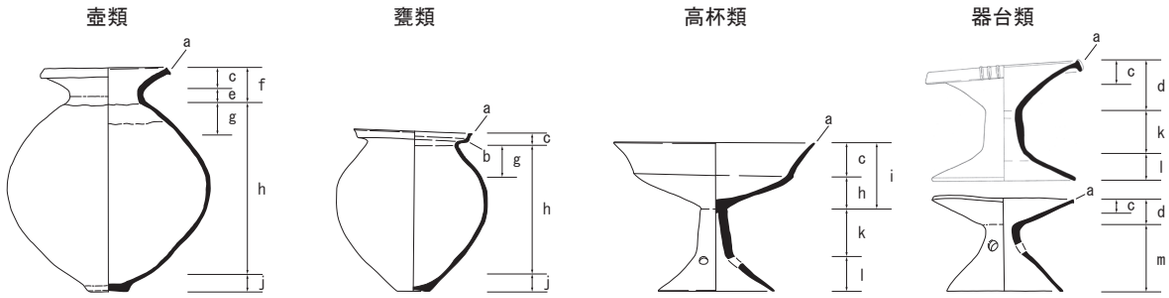

図３　各類における部位の名称

が混在する本稿の対象地域では、なおさら困難である。

以上の二つをおもな理由として、壺や甕に関しては、時期的な消長関係を示すうえで必要となる最低限の分類案を採用した。

（１）壺類

（１－１）広口壺　口縁部径が頸部径を大きく上回る比較的に短い口頸部と、丸い体部をもつ一群である。器高 30㎝前後の個体を主とする。加飾の有無や口縁の形状により細分をおこなう。

広口壺Ａ　緩やかに屈曲しながら外上方へ広がる口頸部をもつ壺のうち、沈線や列点などの加飾がないもの。体部中央付近に最大径をもつことが多い。口縁端部を単純に仕上げる例が多いが、口縁端部を垂下させた、やや幅のある端部形状の例がある。

広口壺Ｂ　緩やかに屈曲しながら外上方へ広がる口頸部をもち、体部は下半部が張り出す無花果状となる。沈線文や列点文、円形浮文等により加飾される。

広口壺Ｃ（受口壺）　外方へ緩やかに屈曲しながら上方へ伸びる頸部をもち、口縁部を受口状に屈曲させる。受口状口縁部の下端に列点文などを施し、体部を多条沈線文や列点文などで飾る１類と、加飾のない２類に分ける。

広口壺Ｄ（パレス系壺）　垂下させるなどして拡張した口縁端部に擬凹線文を施し、体部を施文と赤彩で加飾する濃尾地域に通有の形式。あるいはその系譜を引くものを一括した[7]。

広口壺Ｅ　外方へ緩やかに屈曲しながら上方へ伸びる口頸部をもち、口縁端部付近ではやや内傾する。口縁端部外面を肥厚させることで外見上は受口状になる。

（１－２）二重口縁壺　広口壺を土台として、頸部にさらに口縁部を付加した一群である。頸部の形状と口縁部の形状によって細分する。

二重口縁壺Ａ　やや短く外上方へ広がる頸部に、直立気味の口縁部をもつ。多くはないが湖西地域で一定量みられる。

二重口縁壺Ｂ　外上方へ長く伸びる頸部に、外方へ直線的に伸びる口縁部をもつ。そのほか、頸部が体部から明瞭に屈曲して立ち上がる点も特徴といえる。

二重口縁壺Ｃ　短く直線的に立ち上がる頸部は屈曲して外上方、あるいは水平気味に開き、その外端部には外へ広がる口縁部が接合する。口縁部の形状は外反するものと直線的なものが存在する。先行研究では、頸部の屈曲形態および口縁部形態、あるいは浮文などによる加飾の有無によってそれぞれ細分形式を設けることが多いが、本稿で分析する資料には類例がほとんど存在しないためＣ類として一括した。

二重口縁壺Ｄ　内傾して直線的に伸びる口縁部をもつ大形品。

（１－３）長頸壺　長い直線的な口頸部に、丸い体部をもつ一群である。おもに器高によって二大別する。

長頸壺Ａ　器高が 30㎝を超える大型品。

長頸壺Ｂ　器高 20㎝前後の例が多い。口頸部と体部の境界が不明瞭なものや、調整が粗雑なものなどがみられる。

（１－４）短頸壺　短い直線的な口頸部に、丸い体部をもつ一群である。今回の分析対象中には類例が少ないが、今後の資料の蓄積によって細分や、ほかの壺類との明確な差異を指摘できる可能性が大きい。

（１－５）直口壺　直線的に上方に伸びる口頸部に、扁球形や球形の体部をもつ一群である。器高によって大きく二つに分けられる。さらに、小型品については体部の形態によって細分する。

直口壺Ａ　体部高に対して、体部最大径が大きく上回る扁球形をもつもの。口縁部の形状は、直線的に伸びるものと口縁部が内彎するものがある。体部最大径の位置を体部下方にもつ例が比較的多く存在する。ミ

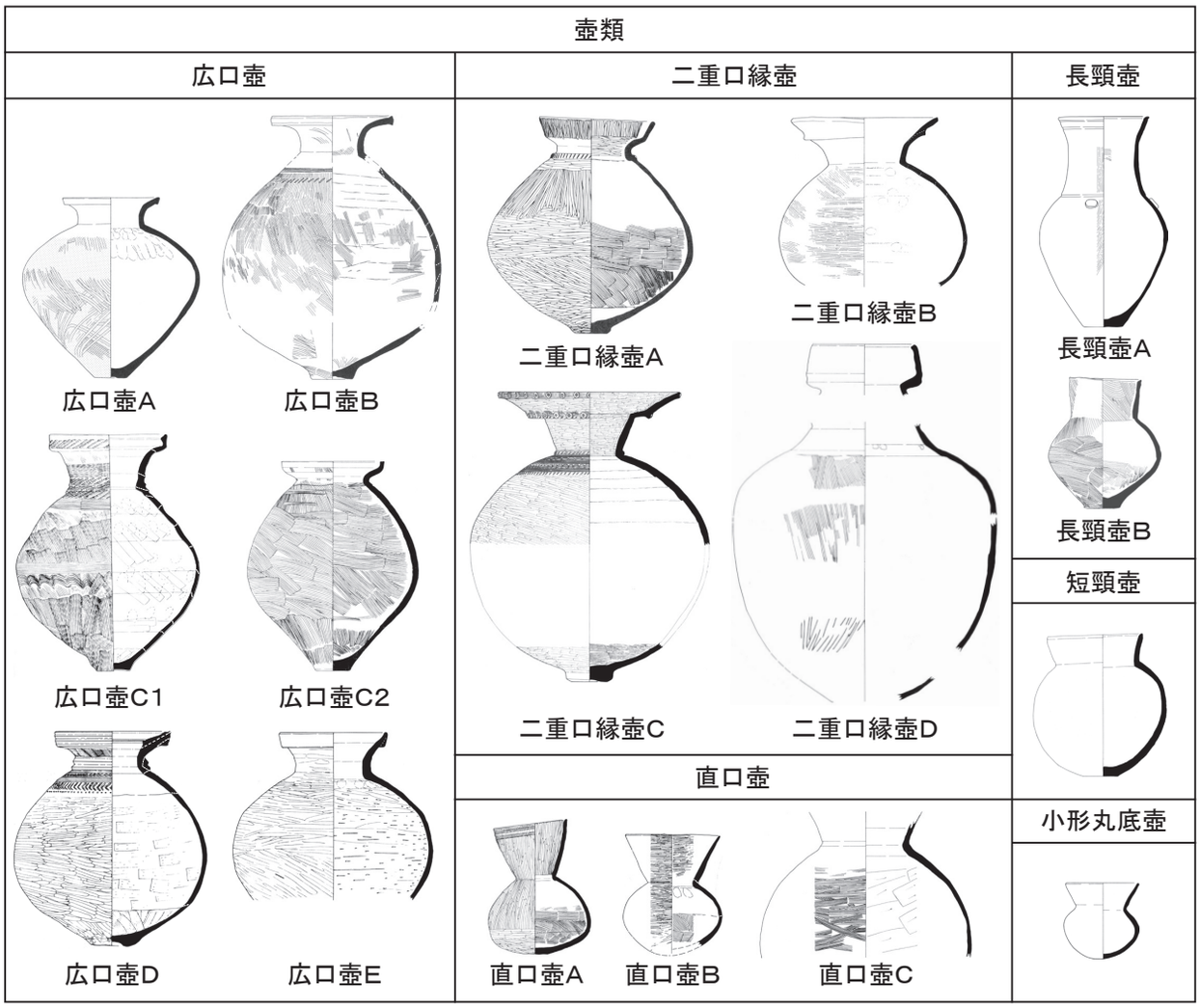

図４　壺類形式分類

ガキ調整を施す例がほとんどであり、器高が 20㎝以下の精製品が多い。

直口壺Ｂ　体部最大径が体部高と同程度の、球形に近い体部をもつ。口縁部の形状は直線的である。器高が 20㎝以下の、横方向のミガキ調整による精製品を基本とする。

直口壺Ｃ　直線的に外傾して立ち上がる口頸部をもつ、器高が 30㎝以上の大型品。

（１－６）小形丸底壺　器高 10㎝前後の小形品を主とした、外上方に伸びる直線的な口頸部と球形に近い体部をもつ壺形土器。底部は丸底である。対象地域では、定型化したものが安定的に存在する様相はみられないため､口縁部の形態等による細分はおこなわない。

（２）甕類

甕類は口縁部の形態差を主として分類をおこなう。また、加飾の有無ならび、調整技法等の差異によって細分をおこなう。甕類は法量差に基づいた使い分けが推定されるため、形式分類には法量を考慮した細分も必要であるが、法量を復元できる対象資料が少なく本稿では実施していない。

甕Ａ（受口甕）　受口状の口縁部をもつ一群。受口状口縁部の下端に列点文などを施すものや、体部を多条沈線文や波線文、列点文などで飾るものを１類として、加飾のない２類と区別する。

甕Ｂ（受口台付甕）　受口状の口縁部をもち、底部に台の付く一群。

甕Ｃ（Ｓ字甕）「Ｓ」字状に屈曲しながら外反する口縁部をもち、底部に台が付く一群。赤塚次郎による「Ｓ字状口縁台付甕」の細分案（赤塚 1990）を参照するが、本稿の対象資料中に甕Ｃが占める比率は高くないため、形式組成に関する分析では、赤塚が細分したＳ字甕のＢ類、Ｃ類とした形式を一括して甕Ｃとする。

甕Ｄ（く字甕）「く」字状に外反する口縁部をもち、体部外面に縦方向のハケ調整を施す平底の一群。

甕Ｅ（布留系甕）「く」字状の口縁部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部が肥厚するいわゆる布留系の甕形土器。体部は球形、倒卵形、長胴形といわれるような楕円形などに分かれ、底部は丸底である。

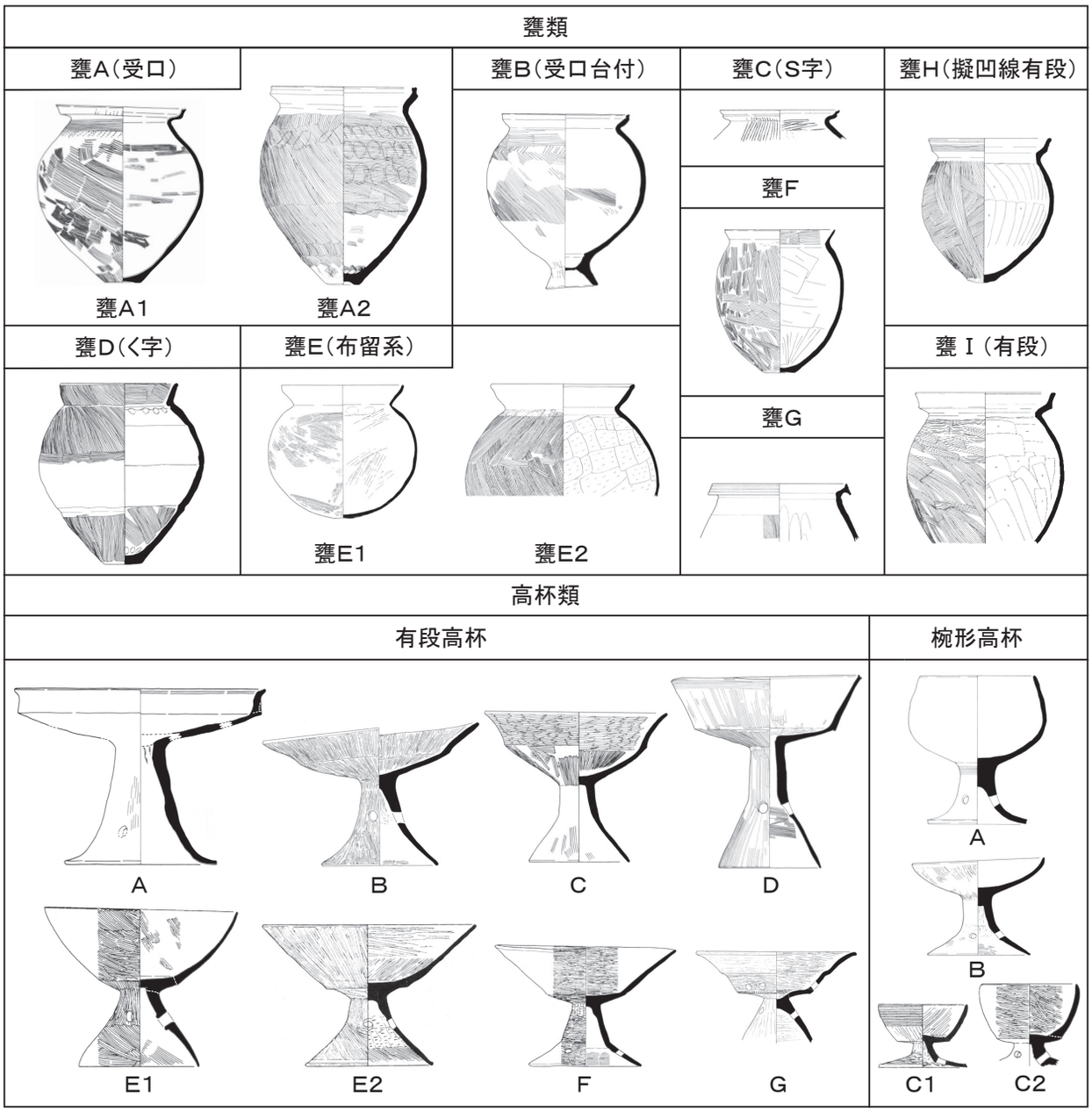

図５　甕類および高杯類形式分類

体部外面にハケ調整を施し、内面はケズリ手法によって器壁を薄く仕上げる。内面に指頭による押捺痕がみられることも多い。以上の特徴を基本とし、口縁端部の形態によって細分する。口縁端部をつまみ上げるか、外方へ引き出す例をＥ１、口縁端部を内側に折り返し、水平方向か下方へ肥厚させる例をＥ２とする。

甕Ｆ　「く」字状に外反する口縁部と、体部外面のハケ調整を特徴とするが、弥生後期の平底甕に系譜をもつと推定される甕Ｄ類とは異なり、内面にケズリ手法を施す一群である。

甕Ｇ（垂下甕）　外方へ短く開く口縁の端部に内傾する面をつくり、下端部をやや垂下させる一群。内傾面には擬凹線文や凹線文、横方向の強いナデ調整などが施される。

甕Ｈ（擬凹線有段甕）　口縁端部に上方へ発達する面をつくり、その外面に擬凹線を施す、月影甕などの名称で知られる甕形土器。対象資料中には、口縁部を外傾させる例が主であり、体部外面にハケ調整を施し、内面をケズリ手法によって仕上げる特徴をもつ。

甕Ｉ（有段甕）　口縁端部に上方へ発達する面をつくる、有段状の口縁形状をもつ一群。 口縁部を外傾させる例を主として、口縁外面は加飾しない。将来的には、他地域で採用される形式と、対象地域内で複数の形式をもとに折衷的に生じた形式とを細分する必要がある。

（３）高杯類

高杯は、杯部が段をもって屈曲する有段高杯、椀形

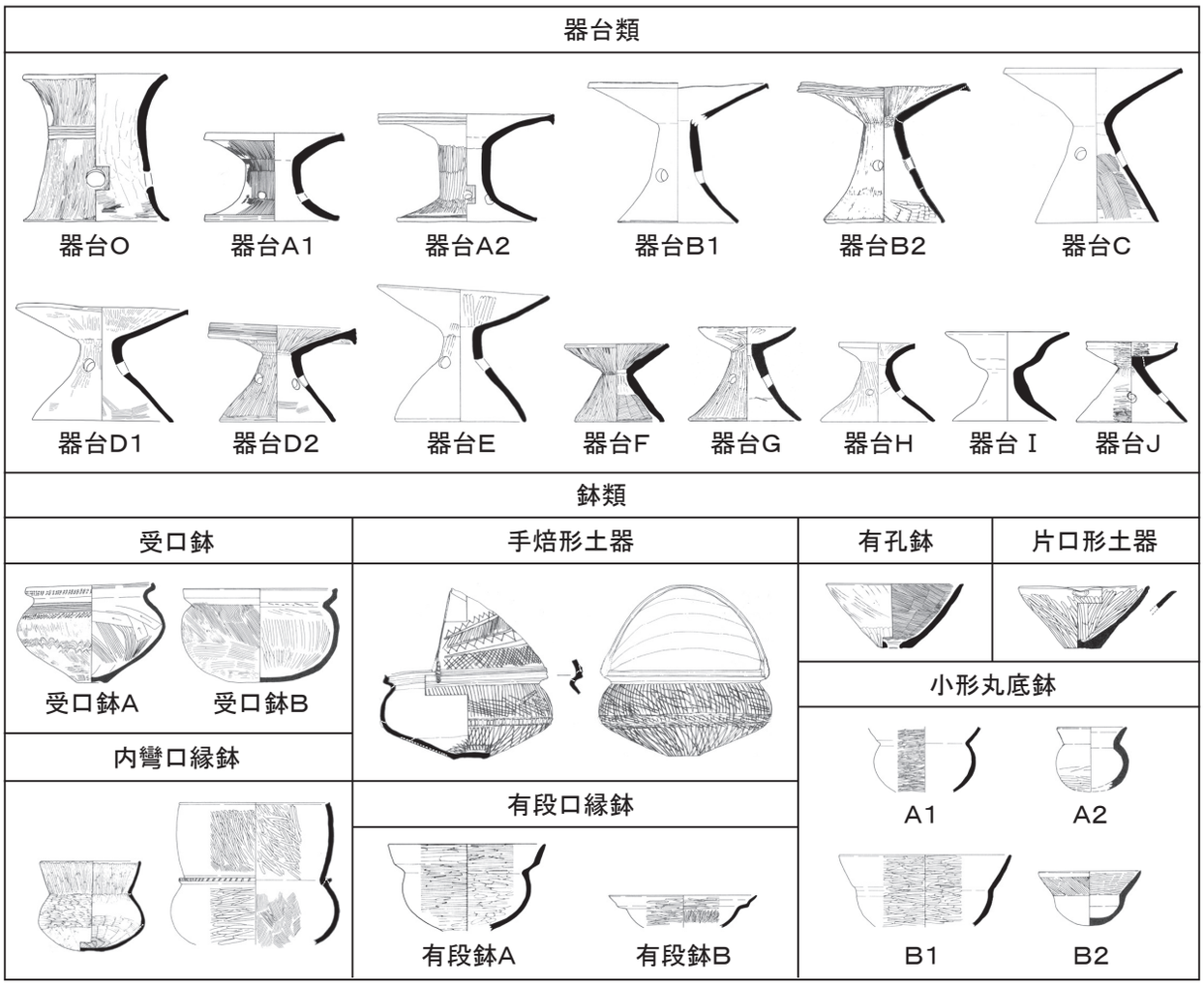

図６　器台類および鉢類形式分類

の杯部をもつ椀形高杯として二大別する。そして、それぞれを杯部の形状や、先行研究に基づく分類によって分ける。

有段高杯Ａ　体部は脚部から浅く外上方へ伸び、明瞭な段を有して口縁部へ接続する。口縁部は上方へ垂直気味に短く立ち上がる。

有段高杯Ｂ　脚部から伸びる体部はＡ類と同様な形態をなすが、段をなして立ち上がる口縁部は外方に広がる。口縁部の高さは、体部高を上回る。

有段高杯Ｃ　口縁部はＢ類と同様に体部からやや外方に立ち上がるが、杯部の形状が深いもの。口縁部高は体部高と同程度になる。

有段高杯Ｄ・Ｅ１・Ｅ２　赤塚次郎による廻間遺跡出土土器を対象とした分類案（赤塚 1990）の高杯 A_1・A_2・A_4 にそれぞれ対応する[8)]。

有段高杯Ｆ　柱状やエンタシス状をなす脚部が特徴的な、やや深い杯部をもつ一群。脚は裾部で屈曲して「ハ」字状に開く。水平気味に伸びた体部から屈曲して、直線的に伸びる口縁部をもつ。杯部や脚部に細い横方向ミガキ調整を丁寧に施す精製品がある。

有段高杯Ｇ　外上方へ開く杯部が、二段にわたって屈曲するもの。

椀形高杯Ａ　口縁径を上回る体部最大径をもつ鉢形の杯部をもつ。いわゆるワイングラス高杯と呼ばれる一群。口縁径が脚径を上回る例を基本とする。

椀形高杯Ｂ　半球状の杯部をもつ。器高が 15㎝より小さい例を主とする。

椀形高杯Ｃ　杯部は稜をもち、口縁部は垂直気味、あるいはやや外方に開いて立ち上がる。大きく開く低い脚部から伸びる体部は、水平であることが多い。器高が 10㎝前後の小形品を主とする。多条沈線文等によって加飾する例をＣ１、加飾のないものをＣ２とする。

（４）器台類

本稿では、器台形土器の型式学的変化に基いて相対的な新旧関係の把握をおこなうため、次節で述べる器台の分析結果を加味して分類した形式もある。おもに器高と脚部の形状によって細分する。

器台Ｏ　明瞭な屈曲部をもたず、体部の上下が緩慢

に広がって口縁部と脚部をつくるもの。筒状器台などの名称で呼ばれる一群[9)]。

器台Ａ　受部と脚部がそれぞれ屈曲部をもってつくられ、体部と明瞭に区別できる。 対称形に近いものが多く、脚部は外反するものと直線的に広がるものがある。口縁端部を尖らせたり、丸く仕上げる、あるいは面取りなどによって単純な形状とするＡ１と、口縁部に粘土を付加して端部を垂下させ、やや幅のある端部形状となるＡ２を区別する。

器台Ｂ　受部が外上方へ直線的、あるいは外反して大きく伸び、脚部は緩やかに広がる。口縁端部に関して、Ａ類と同じ基準でＢ１、Ｂ２の細分をおこなう。

器台Ｃ　外上方へ開く受部はＢ類と同様であるが、脚部は裾部との境界をもたず直線的に伸びる。

器台Ｄ　脚部が裾部付近で内彎する。直線的に開く受部は、Ｂ・Ｃ類に比べやや浅い。口縁端部に関して、Ａ類と同じ基準でＤ１、Ｄ２の細分をおこなう。

器台Ｅ　受部と脚部がともに内彎して広がる形状をとる。体部がやや柱状になる例がある。

器台Ｆ　直線的な受部と脚をもつ形態はＣ類に近いが、器高が 10㎝を下回る小形品である。

器台Ｇ　内彎して皿状を呈する受部と、緩やかに広がる脚部をもち、口径が脚径を下回る。器高 10㎝前後の小形品を主とする。

器台Ｈ　直線的に短く伸びる小形の受部と、緩やかに開く脚をもつ。口径が脚径を下回る、器高 10㎝以下の小形品。

器台Ｉ　有段高杯Ｇを模倣した形状と推定される、器高 10㎝以下の小形品。

器台Ｊ　内彎して皿状を呈する受部と短く立ち上がる口縁部をもち、脚部は直線的に開く。器高が 10㎝以下の小形品で、横方向のミガキ調整を施す精製品。

（５）鉢類

鉢形土器は、原則的に口縁部径ないしは体部最大径が体高を上回るという形態的な基準により、本稿では壺や甕と区別をおこなう。

（５－１）受口鉢　受口状の口縁部をもつ一群。口縁部下端の列点文や、体部を多条沈線文や波線文、列点文などで飾るＡ類と、加飾しないＢ類に分ける。

（５－２）手焙形土器　鉢形土器に蔽いが付加された一群であり、口縁部や体部、底部や蔽いの端部の形状に差異がみられるが、受口鉢に蔽いが付いたものを基本形として理解する。

（５－３）有孔鉢　穿孔が施された小さな平底から、直線的に、あるいはやや内彎して立ち上がる形態の体部をもつ、器高が 10㎝前後の一群。

（５－４）片口形鉢　口縁部の片側に注口をもつもの。小さな平底から口縁部にかけて緩やかに内彎する器高 10㎝前後の椀形が主体であるが、体部最大径が口径を上回る壺形を呈する例もある。ミガキ調整による精製品が多い。

（５－５）内彎口縁鉢　扁平な楕円形の体部をもち、上方へやや長く伸びる口縁部が内彎するもの。口縁部高が体部高の２分の１を上回ることを条件とする。体部高と同程度の口縁部高である例が多い。体部に横方向、口縁部に縦方向のミガキ調整を施す精製品を基本とする。内彎した口縁部上方に多条の沈線文を施す例や、頸部に刻み手法を施す突帯をめぐらす例が存在する。

（５－６）有段口縁鉢　有段状の口縁部をもつ、器高が 10㎝程度の一群。おもに体部の形状により細分する。

有段口縁鉢Ａ　扁平な楕円形の体部をもつ。口縁部は外傾し、口縁部外面は加飾しない。器面の内外面に横方向のミガキ調整を施す精製品。

有段口縁鉢Ｂ　浅い体部もつ。器高が口径の２分の１より小さく、口縁部高が体部高より小さいものとする。横方向のミガキ調整を施す精製品。

（５－７）小形丸底鉢　外上方に伸びる口頸部と丸底をもつ、器高 10㎝以下の小形品。口径ないしは体部最大径が器高を上回る点で、小型丸底壺と区別する。器高に占める口頸部高の比率および、調整の精粗で細分する。

小形丸底鉢Ａ　口頸部が短く、口頸部高が占める割合は器高の３分の１未満である。

小形丸底鉢Ｂ　口頸部はやや長く、器高の２分の１程度を口頸部高が占める。

Ａ類、Ｂ類ともに、細い横方向のミガキ調整による精製品を１類、ハケ調整やナデ調整等を施し、１類と比べて調整が粗雑なものを２類として区別する。

４－２．器台形土器の編年

４－２－１．型式学的な変遷

器台形土器の型式学的な変遷を明らかにするため、はじめに、分析の基本的な方針を示す。湖岸北半地域の土器編年研究において器台の型式変化を基軸としたものがほとんどないため、分析視点や方法を説明し、器台の変遷を客観的に理解しようとする本稿の立場を明確にする。

表２　分析資料一覧

No.	遺跡名	遺構	図番号	a：口径	b：器高	c：脚径	d：透孔	形式	備考
1	大塚	SB0003	46	15.45	9.75	14.85	2.4	A1	
2	法光寺	SB-05	9	19.35	11.7	15.3	2.4	A2	
3	大塚	SB0023	145	18.6	9.3	14.55	2.85	A1	
4	弘川常盤	SH-11	148	20.7	15.75	19.2	4.2	A2	透孔なし 脚部屈曲点明瞭
5	大辰巳	SD-04	39	19.8	14.7	13.2	3.3	A1	
6	大辰巳	SD-04	40	19.65	15.3	13.2	4.5	B1	
7	針江川北（Ⅰ）	SH-1	426	22.65	15.5	15.9	3.3	A2	
8	針江川北（Ⅰ）	SH-1	435	21.75	16.2	16.05	4.5	A1	
9	針江川北（Ⅰ）	土器群C	2043	19.2	13.8	14.55	3.75	B2	
10	十里町	４号方形周溝墓	32	18.8	15.2	13.2	5.6	B2	
11	桜内	79SB57	8	16.65	14.4	12.45	6	C	
12	桜内	85SB2	39	19.65	16.8	13.5	6.9	C	
13	桜内	85SB2	40	18	12.75	15.6	5.4	D1	
14	正伝寺南	土器群3	192	18.6	15.3	13.05	5.4	D1	
15	正伝寺南	土器群3	193	17.7	13.2	14.1	4.8	C	
16	正伝寺南	土器群11	222	13.95	13.05	13.5	3.75	E	
17	正伝寺南	土器群6	241	14.4	9.45	12.6	3.6	D2	
18	正伝寺南	土器群７	333	18	11.1	13.65	5.25	B2	透孔二段
19	正伝寺南	土器群７	335	16.5	11.7	13.5	5.25	C	
20	正伝寺南	土器群７	336	15.45	11.7	12.9	4.8	C	
21	正伝寺南	土器群７	337	18.6	13.2	15.6	5.55	D1	透孔二段
22	正伝寺南	土器群７	338	15.9	13.8	14.1	5.4	E	
23	正伝寺南	土器群７	339	11.4	8.55	9.9		F	透孔なし
24	正伝寺南	土器群10	415	16.2	10.8	12.6	4.05	D2	
25	正伝寺南	土器群10	416	18	12.45	14.1	4.35	B1	
26	堀部西	落ち込み	159	19	15.2	14.6	5.9	E	
27	堀部西	落ち込み	160	18.9	13.1	15.6	5.6	D1	
28	墓立Ⅱ	第３トレンチ 第４住居址	4	9.6	9.45	11.85	4.65	G	
29	北郷里小	T-13SX01	227	8.42	8.95	11.92	5.01	G	
30	弘川常盤	SH-1	10	8.25	8.7	12.45	2.85	H	
31	弘川常盤	SH-1	12	13.65	9.6	9.3		I	透孔なし
32	弘川常盤	SH-1	13	19.2	15.6	14.1		D1	透孔なし
33	越前塚	SX55	18	10.8	10.2	12.45	4.05	G	
34	黒田	SX01	130	9.2	7.5	8.9	2.7	F	
35	黒田	SX01	131	7.85	8.6	12.2	3.75	H	
36	黒田	SX01	132	11.4	12.2	14	6	G	
37	森前	E・北部（溝）	90	10.05	8.7	12.15	2.4	J	

分析ではまず、形式分類をおこなったのち、型式学的な変化の基準となる始点と終点を定める。次に、始点から終点までの各形式間の変遷を理解する。その際に、変化の方向性を判断するため、器台の各部位を測定してその数値の変化を読み取る。最後に、一括資料中における各器台形式の共伴関係を整理して、相対的な時期区分をおこなう。

形式分類における各形式の内容については、前項の分類に準ずる。編年の始点となる形式は、先行研究に則り、近江第Ⅳ様式の終わりに登場する筒状の器台と同様な形状を呈する、器台Ｏ類とする。終点は、古墳時代前期に盛行する器種と理解されている、いわゆる小形器台[10]とする。本稿では器高が10㎝以下に縮小する、Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｊ類といった小形品全般が該当する。実際には、それらが衰退してみられなくなるまでの変遷を辿った。すなわち、本稿の分析では筒形をした器台から形態が変化していき、小形品が現れ、消滅するまでの過程を明らかにする。

では、具体的な各形式間の変遷過程がいかなるものか、検討をおこなう。表２は、器台の各部位を測定した値等の一覧である。測定部位と名称は図７のとおりである。分析試料は、過去の編年研究で比較的に一括性が高い資料と理解され、検討対象とされてきた資料を主として筆者が選択した。

図８は口径をＸ軸、器高をＹ軸として、大きさの把握を目的としたグラフである。一見して注目されることは、器高において、15㎝以上の大型品、13㎝前後の中型品、そして10㎝以下の小型品と、大まかに三つのグループに分かれる点である。大きさと各形式の相関については、下記で形式間の変遷を説明する際に、

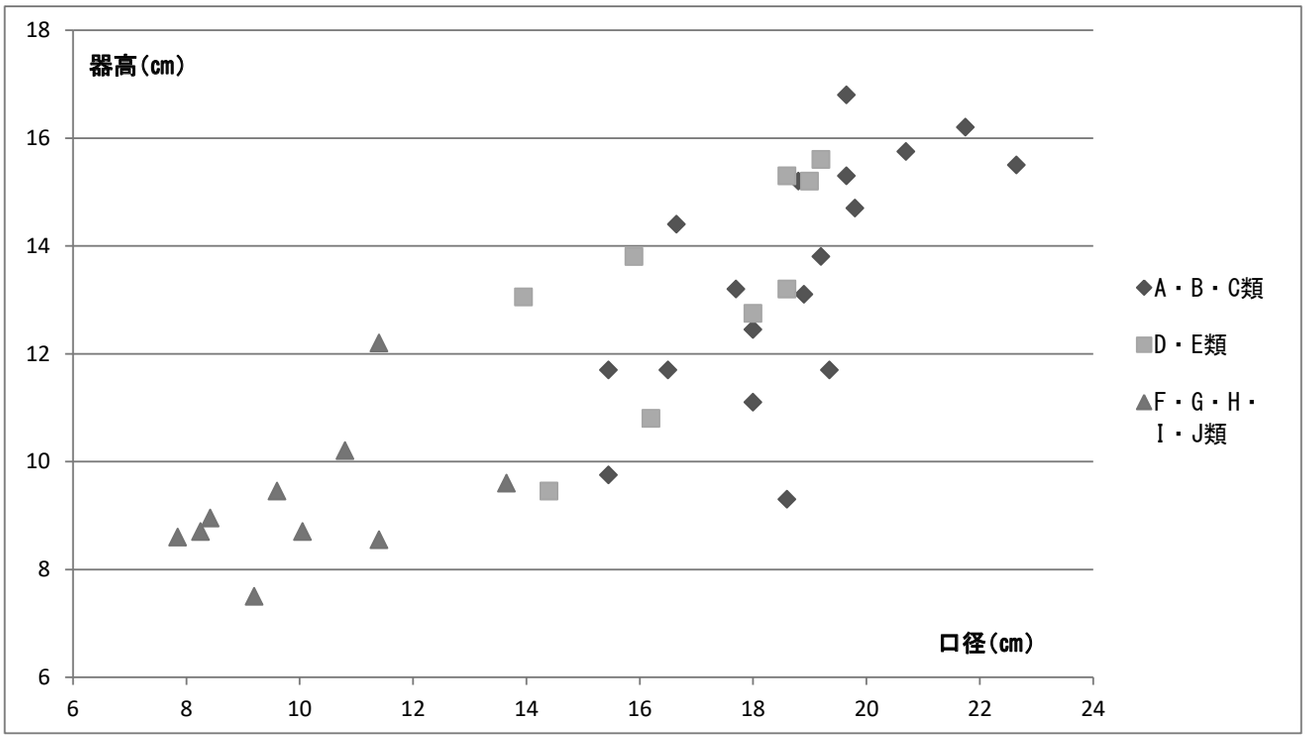

図８　器台の口径と器高

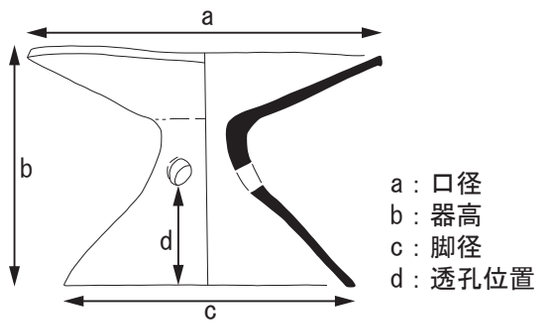

図７　器台の測定部位

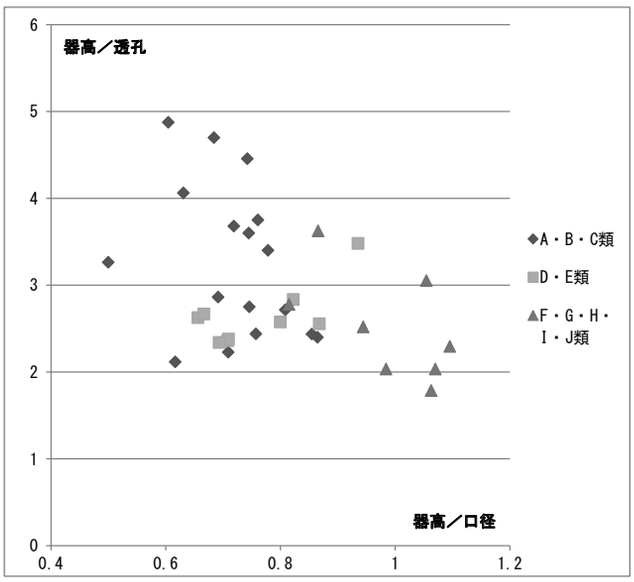

図９　器台の形状と脚の屈曲度

必要に応じてふれる。

『彦根市史』で「この地方独特の器形」と言及された器台（佐原 1960：pp.107）は、本稿のＡ類およびＢ類に該当するものである。これらが、弥生時代後期の近江地域における代表的な形式であることを考慮するならば、まず、始点としたＯ類からＡ・Ｂ類への変化を推定できる[11]。

Ｏ類とＡ・Ｂ類の大きなちがいは、明瞭に判別できる受部と脚部の有無である。判然とした屈曲部をもたないＯ類に対し、Ａ・Ｂ類は変化点をもって受部や脚部をつくりだす。したがって、器台の変遷過程における第一の変化は、受部と脚部の明瞭化といえる。

その一方で、Ａ類とＢ類は、脚部の形態に関して差異が指摘できる。Ａ類は体部と脚部が境界をもつことによって体部が判別できるが、Ｂ類は体部と脚部の境界が不明瞭である。同様に、体部と脚部の境界が不明瞭であるのはＢ・Ｃ・Ｄ類である。そして、小形品のＦ・Ｇ・Ｈ・Ｊ類が明確な体部をもたない形式であることをふまえれば、脚をつくりだすＡ類より、Ｂ・Ｃ・Ｄ類が新しい要素をもった形式と理解できる。

加えて、本稿で扱った一括性の高い資料のなかには、Ａ類が単独で存在するものとＡ類とＢ類が共伴するもの、そして、Ｂ類とＣ類が共伴するものがみられる。また、この３類で構成される一括資料の器台は、概して外上方へ大きく伸びた受部を有する、15㎝以上の大型品である。

以上の状況から、Ａ類からＢ類を介してＣ類へと変化したと推定できる。この変化の内容を言い換えるならば、受部の拡大と器高の伸長、器高の伸長と連動し

た脚部屈曲点の上昇といえる。そして、屈曲点の上昇は、結果として脚部の直線化を導いたと理解できる。受部の拡大と器高の伸長を第二、脚部の直線化を第三の変化とする。

脚部屈曲点の変化を実際に測定値から示したものが図９である。この図をみると、脚部屈曲点が低い位置にあるＡ類から、直線的な脚部をもつＣ類へ、グラフの上方から下方へと変化する様子を読み取ることができる。

この散布図の横軸と縦軸は、それぞれ器高と口径の比、器高と透孔下端までの距離の比である。Ｘ軸では、口縁を基準とした際に縦方向に伸びた形状にみえるか、あるいは横方向に伸びた形状にみえるかを示している。すなわちこれは、器台の視覚的なバランスを示す値であり、図の右側ほど、器高に対して口径が小さいものが配置される。

Ｙ軸は、器高に対して透孔下端までの距離が占める割合を示しており、脚部の屈曲の様子を数値的に示すといえる。本来的には透孔下端までの距離ではなく、屈曲点を直接とらえることが望ましいが、脚部を緩慢に屈曲させるＢ類やＤ類などの例については、屈曲点の位置に対する理解が測定者で異なる可能性が高く、屈曲点までの距離を数値化して客観的な分析を実施することは難しいと考えた。

しかしながら、前述のとおり、屈曲点の上昇および、上昇に伴う脚部の直線化は、器台を編年するうえで重要な変化であると判断されたため、本稿では、脚部の屈曲度を客観的に示すために透孔下端までの距離を採用した。

図や表に示したように、脚部屈曲点が明らかなＡ類は、屈曲部に対応して下方に透孔がある。その一方で、緩やかに開く脚部をもつ形式では、透孔が高い位置に施される傾向がみられ、器高に対して透孔下端までの距離が占める割合が大きくなる。実際に、直線的な脚をもつＣ類は、Ｙ軸に関して総じて低い値を示しており、透孔の位置が、屈曲度と密接に関連するという推定は妥当だといえよう[12)]。

この推定により、緩やかに開く脚部ををもつ形式については、図９上の推移に基いて、相対的な時期変化を把握する。つまり、Ａ・Ｂ・Ｃ類に関しては、時期が下るにつれて基本的に左上方から右下方へ推移すると理解する。

脚部屈曲点の上昇および、それに伴う直線化に続く、第四の変化は、Ｄ類やＥ類の特徴である、脚部を内彎させる変化である。この変化については、上述のＡ類からＣ類までの漸次的な変化とは異なり、外的な要因による影響が考えられる。

その要因は、濃尾平野地域で普及する高杯の、湖岸北半地域への流入といえるだろう。本稿でＥ１類高杯としたそれらの大きな特徴の一つが、脚部を内彎させる点である。したがって、新たに採用された内彎脚をもつ高杯の影響を受けて、器台のＤ・Ｅ類がつくられるようになったと理解する。

Ｄ・Ｅ類の登場に関してさらに興味深い点は、図９上の推移である。Ｄ・Ｅ類は全体的に、Ａ類からＣ類で確認したグラフの左上から右下への推移とは別に、Ｙ軸の２から３付近、Ｘ軸の 0.65 から 0.85 付近にかけて、横方向に散在する様子がみられる。

なかでも、Ｘ軸の 0.65 から 0.75 付近の限られた範囲に属する一群は、図８で確認した 15㎝以上の大型品を含まず、さらに、器高が 10㎝前後まで縮小するＤ類の小形品を含むことがわかる。この状況から、Ｄ・Ｅ類に関しては、Ｘの値が減じる方向に推移したと理解できる可能性が高い。この変化は、比較的に縦長の形態をとる器台から、器高に対して大きな口径をもつ、より扁平な形への変化といえる。

最後に確認される変化は、小形品、Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ類の登場である。これらは、器高が縮小することに注目して設定した形式だが、小形品のなかでも、受部に着目してさらに大別することができる。

Ｇ・Ｈ・Ｊ類は、口径が脚径よりも小さくなる点が大きな特徴である。Ａ～Ｅ類にはないこの特徴の出現は、器台の形態変化のみならず、器台に載せる形式の変化を含む、土器構成の大きな変化の可能性がある。

したがって、小形品のなかでも、中・大形品の特徴を色濃く残すＦ類に対して、口径が脚径よりも小さくなる一群を、より新しい傾向をもつ形式と理解した。

Ｆ・Ｇ・Ｈ 類に関しては、Ａ～Ｅ類の特徴と考えられる部分が残存するため、それらから変化したと理解することはそれほど難しくない。特にＦ類は、Ｃ類が著しく扁平化した形態といえるため、Ｄ・Ｅ類の登場以降に生じる、小形化、扁平化の結果ととらえられる部分は多い。

また、Ｇ類の特徴である内彎して皿状を呈する受部を、Ｅ類の受部に由来するものと理解できるならば、Ｇ類も、中・大形品にみられる変化の中で登場したと説明できるかもしれない。脚部の形状がＢ類やＤ類と共通する点もその可能性を補強している。

一方で、Ｉ類やＪ類は一括資料としてＦ・Ｇ・Ｈ類とともに登場するが、一見して対象地域内で系譜関係を辿ることが難しく、他地域からの影響と判断できる。

発掘資料が蓄積された今日でも、Ｆ・Ｇ・Ｈ 類を含めた小形品は、対象地域での事例が少ない。そのため、これら各形式の型式学的な変遷を十分に把握することは難しく、あくまで小形品が登場することを重視し、各形式の関係性についての検討は類例の蓄積を待

ってあらためておこないたい。

以上に述べてきたように、対象時期に属する器台は以下の観点から変遷過程を辿ることができた。第一に受部と脚部が明瞭化することでＡ類が登場し、その後、第二の変化として受部の拡大と器高の伸長が生じる。それに伴い、第三の変化である、脚部屈曲部の上昇と、その結果として生じる脚部の直線化が進み、その過程でＢ類とＣ類が現れる。

そして、高杯の変化に呼応するように、器台にも第四の変化として内彎脚が採用されるようになり、Ｄ・Ｅ類が登場する。最後に、それ以前に系譜をもたない形式を含む、小形品が主流を占めるという、器台類の構成にみられる大きな変化が生じる。その後に続く器台類の衰退とも重なることで、器台の型式学的な変遷は辿ることが困難になる。

４－１－２．共伴関係からみた変遷

前項では器台の型式学的な変遷過程を説明したが、続いて、各形式の共伴関係を重視してそれらの相対的な前後関係を整理する。

対象時期における器台類の始点としたＯ類は、湖岸北半地域に良好な資料が少ないが、針江北・針江川北遺跡ＳＤ－ 29 および、弘川遺跡竪穴住居 11 出土資料中に脚部の破片が存在する（図 10 － 1）。ほかの器台と共伴せず、始点として理解するうえで矛盾しないが、受部の形状等は不明であり、今後の資料の蓄積が望まれる。

Ａ類は、大塚遺跡ＳＢ 0003（図 10 － 2）や法光寺遺跡ＳＢ－ 05（図 10 － 3）などをはじめとして、Ｏ類に比べ多数の資料が存在する。前項でふれたように、Ａ類には、単独で存在するもの、Ｂ類と共伴するものがある。先にあげた２例は前者であり、後者には大辰巳遺跡ＳＤ－ 04 出土資料（図 10 － 4，6）が該当する。Ｃ類と共伴する例は現状ではみられず、このことから、Ａ類からＢ、Ｃ類へと相対的な前後関係を推定した。

桜内遺跡 85 ＳＢ２出土資料[13] には、器形全体のわかるＣ・Ｄ１類（図 10 － 8，9）が確認できる。そして、正伝寺南遺跡土器群７資料には、同じく良好な状態のＢ２（図 10 － 12）・Ｃ（同図 13）・Ｄ２（同図 15）・Ｅ・Ｆ類（同図 11）がみられる。また、堀部西遺跡落ち込み出土資料には、Ｄ１・Ｅ類（図 10 － 10，14）を確認できる。

このうち、桜内 85 ＳＢ２のＣ類は器高が 15㎝以上の大型品であるのに対し、正伝寺南土器群７に含まれるＢ２・Ｃ類は器高が 11㎝前後と縮小する。さらに、小形品に含まれるＦ類を含む点からも、正伝寺南土器群７は桜内 85 ＳＢ２資料より後出的な要素が多いといえる。加えて、堀部西落ち込み資料の状況をふまえると、Ｃ・Ｄ類よりも、Ｅ類ならびにＦ類が後出すると理解して差し支えないだろう。

小形品が器台類の主体を占める段階を迎えると、中・大形の形式は急激に衰退する。弘川常磐遺跡ＳＨ－１出土資料には、器形全体がわかるＨ・Ｉ類（図 10 － 17，18）とともにＤ１類（同図 19）がみられるが、脚部の破片にも小形品が多く、主体が小形品に移った段階と考えられる。

Ｄ１類とした資料についても、脚部の内彎は裾付近をわずかに内彎させる程度であり、受部がやや上方へ開く点など、Ｄ類とした前段階までの資料と異なる。これを退化したＤ類と見なすことが許されるならば、弘川常磐ＳＨ－１資料は、小形品を主体としながら、退化した中･大形品が少量残存する段階と評価できる。

黒田遺跡ＳＸ 01 出土資料は、後にも述べるが、やや幅広い時期幅をもつ資料と考えられるため、資料同士の前後関係を明らかにするために適切とはいえない。しかし、Ｆ・Ｇ・Ｈ類（図 10 － 20 ～ 22）など、小形品を主体とする段階以降の資料が多いことは間違いなく、明らかな中・大形品を含まない点から、弘川常磐ＳＨ－１資料に代表される段階に後続する段階と判断した。

針江川北・吉武城遺跡土器群Ｂでは、器台類全般が衰退し、確実に存在するものは丁寧な横方向のミガキ調整を施すＪ類（図 10 － 24）のみである。この段階を最後として、土器構成中に器台類はほぼ認められなくなる。

一括資料にみられる各形式の共伴状況を根拠としてそれらの前後関係を判断してきたが、前項と同じく資料数の制限を理由に、小形品を含む一括資料の位置づけに関しては、検証が不十分な箇所が残されていることを最後に断らねばならない。

４－１－３．小結

以上の検討に基いて、器台の変遷からみる相対的な時期変化を、以下の９段階に設定する。変遷の概要は図のとおりである（図 10）。

第Ⅰ段階はＯ類、第Ⅱ段階はＡ類が、それぞれ単独で存在する段階である。続く第Ⅲ段階は、Ｂ類が登場してＡ類と共伴する段階である。

第Ⅳ段階になると、Ａ類はみられなくなり、Ｃ類、Ｄ類が登場する。そして、第Ⅴ段階にはＥ類とＦ類が現れ、Ｂ・Ｃ・Ｄ類には器高が縮小した小形品がみられる。

第Ⅵ段階は、前段階まで主体的に採用された大、中形の形式が衰退し、Ｇ・Ｈ・Ｉ類などの小形の器台が新たに採用される。器台の変化を重視した場合、一大

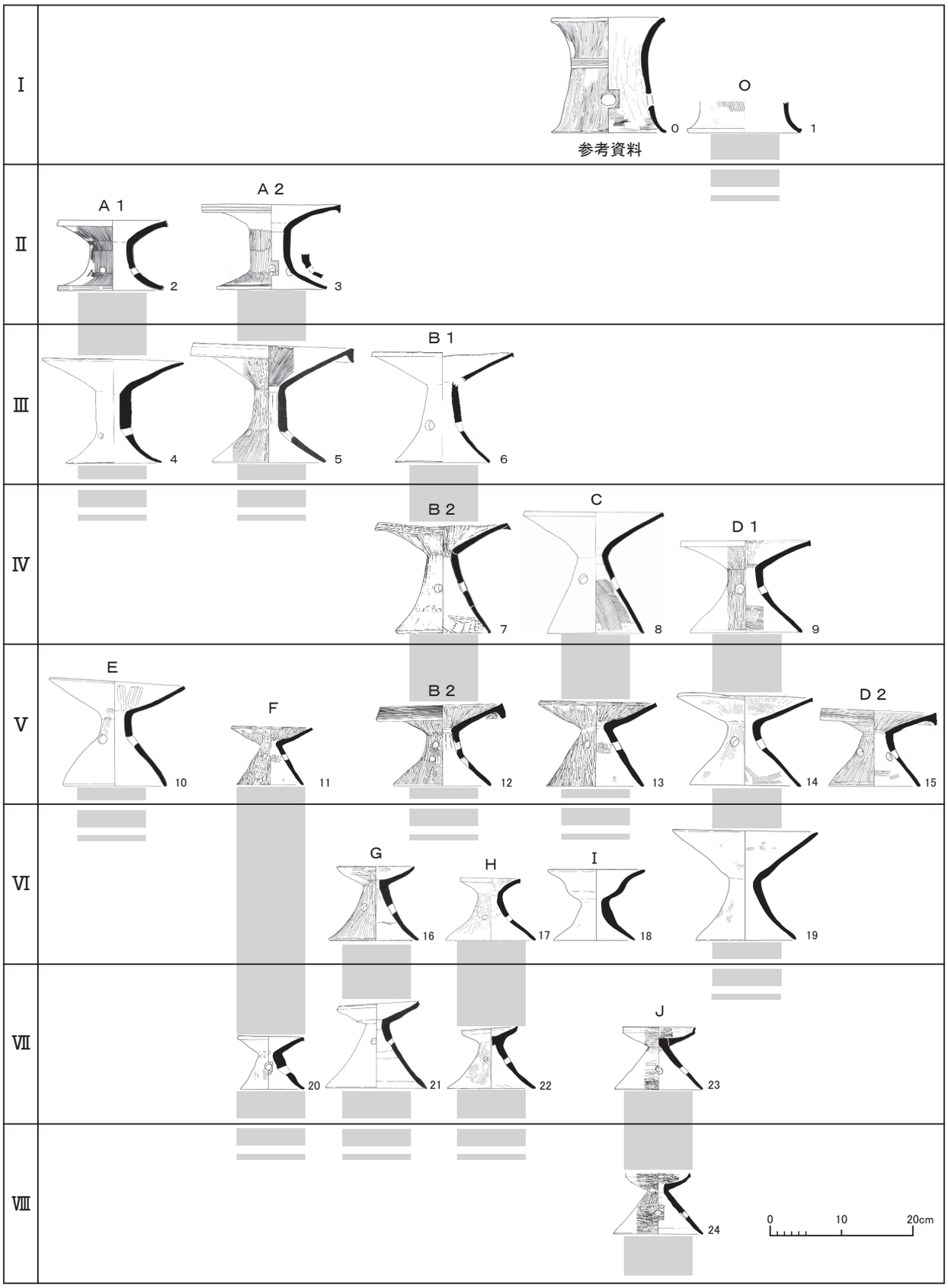
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
参考資料
O
A 1
A 2
B 1
B 2
C
D 1
D 2
E
F
G
H
I
J
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
0
10
20cm

図 10　器台の変遷

表３　形式消長関係一覧

形式＼時期	壺類																甕類									
	広口壺						二重口縁壺				長頸壺		直口壺			短頸	小丸									
	A	B	C1	C2	D	E	A	B	C	D	A	B	A	B	C			A1	A2	B	D	E1	E2	F	G	H	I
Ⅰ	●		●								●							●			●				●		
Ⅱ	●	●	●									●						●	●		●						
Ⅲ	●	●		●	●		●					●	●					●	●	●	●					●	
Ⅳ	●			●	●		●					●	●					●	●	●	●					●	●
Ⅴ	●			●	●		●		●				●			●		●	●	●	●					●	●
Ⅵ	●					●	●	●	●				●			●			●		●	●					
Ⅶ	●							●	●	●				●		●			●		●	●					
Ⅷ	●							●		●				●	●	●	○		●				●	●			●
Ⅸ								●		●				●	●		●		●				●	●			●

形式＼時期	高杯類												器台類													
	有段高杯								椀形高杯																	
	A	B	C	D	E1	E2	F	G	A	B	C1	C2	0	A1	A2	B1	B2	C	D1	D2	E	F	G	H	I	J
Ⅰ	●									●			●													
Ⅱ	●	●							●	●				●	●											
Ⅲ		●	●	●					●	●				●	●	●	●									
Ⅳ			●	●	●					●						●	●	●	●	○						
Ⅴ			●		●	●				●	●					○	●	●	●	●	●	●				
Ⅵ						●		●		●	●								●			●	●	●	●	
Ⅶ						●	●			●												●	●	●		●
Ⅷ							●			●																●
Ⅸ							●																			

形式＼時期	鉢類											
	受口鉢		手焙	有孔	片口	内彎	有段鉢		小形丸底鉢			
	A	B					A	B	A1	A2	B1	B2
Ⅰ	●											
Ⅱ	●	●										
Ⅲ	●	●	●	●	●							
Ⅳ	●	●	●	●	●	●						
Ⅴ	●	●	●	●	●	●						
Ⅵ		●					●					
Ⅶ		●								●		●
Ⅷ								●		●	●	
Ⅸ									●	●		

画期として認識できる。わずかに残った大･中形品も、第Ⅶ段階になるとみられなくなり、当段階では、本稿で扱った小形品のなかで最も新しい形式と考えられるＪ類が登場する。Ｊ類の位置づけについては器台以外の形式との関係性から後の項で補足的に説明する。

第Ⅷ段階は、Ｊ類のほかに器台が確認できなくなり、器台類の衰退が窺える。最後に、図には示していないが、器台類が総じてみられなくなる段階を第Ⅸ段階として設定する。

５．各段階における形式の消長

器台の変遷に基いておこなった段階設定をふまえて、集成した一括資料に含まれる、そのほかの形式の消長関係を整理する（表３）。検討の結果、前項で設定した各段階の推移に関して、ほかの形式変遷からも大きな矛盾は認められなかったため、これ以降は各段階をそれぞれ時期として把握する。以下、器類別に消長関係をみていく。

５－１．壺類の消長（図 11 ～ 14）

壺類は、広口壺Ａ類がⅠ期からⅧ期にかけて継続的にみられるが、そのほかの形式は数時期のみの比較的に短期間で消長していく。各形式間に連続的な変化を求めることは難しく、他地域の影響を強く受けて成立した形式が存在することが窺える。

Ⅰ期からⅡ期は、琵琶湖沿岸一帯で採用される受口状口縁甕と同様の、特徴的な口縁形状や加飾を有する広口壺Ｃ１類がみられる。Ⅱ期には広口壺Ｂ類が確認できるようになり、Ｃ１類とともに施文によって加飾する壺が盛行する段階といえる。また、Ⅰ期には長頸壺Ａ類が存在するが、Ⅱ期になると衰退し、小形化が進んだ長頸壺Ｂ類が登場する。

Ⅲ期になるとＣ１類が衰退し、無文のＣ２類が登場する。加えて、濃尾地域で主体的に採用されることが知られる広口壺Ｄ類が確実に現れ、二重口縁壺Ａ類がみられるようになる。器台に載せて使用したと考えられる直口壺Ａ類が登場する点も、Ⅲ期の大きな変化といえる。

Ⅳ期はⅢ期に登場した形式が引き続き採用されるが、広口壺Ｂ類は良好な事例がみられなくなる。長頸壺Ｂ類も衰退し、次の時期には残らない。Ⅴ期から確実な例がみられる短頸壺は、Ⅳ期には既に存在した可

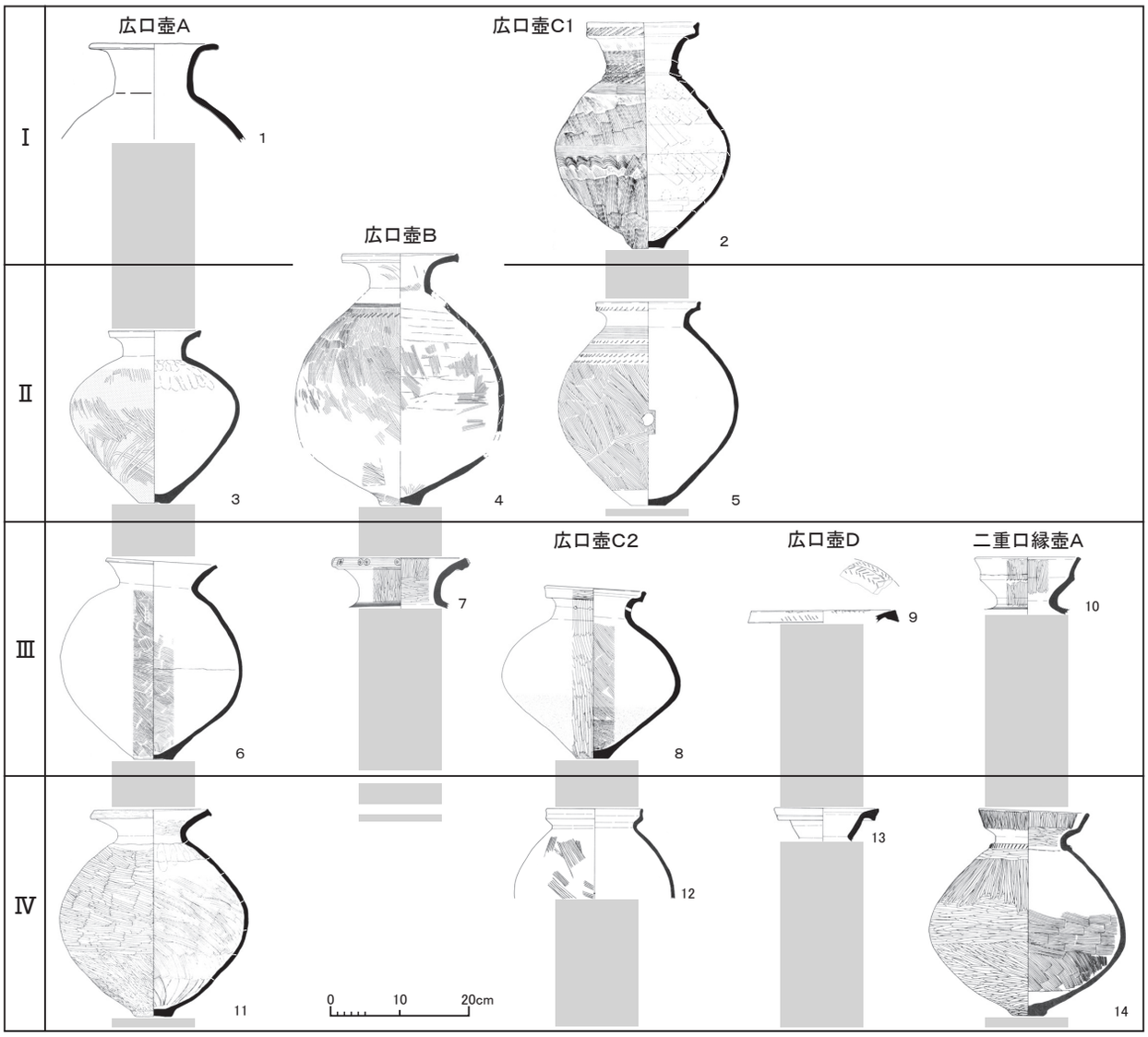

図 11　壺類の消長①

能性があるが、現状では安定して組成する様子は確認できない。

Ⅴ期には二重口縁壺Ｃ類が登場する。近江地域固有の受口状口縁を採用する広口壺Ｃ類は、この時期までで衰退する。また、外来系形式でありながら定着した広口壺Ｄ類も同様に衰退傾向を迎える。

Ⅵ期は、Ⅴ期まで継続的に採用された形式がみられなくなり、広口壺Ｅ類や二重口縁壺Ｂ類といった、前時期からの連続性を見出すことが難しい新たな形式が採用される。Ⅲ期以降、広く普及した直口壺Ａ類も、確認することはできたが、衰退する様子がみられる。これらを根拠とすると、Ⅴ期とⅥ期の間は、壺類に関する大きな画期と理解できる。

さらに、Ⅶ期には、直口壺Ａ類や、同じくⅢ期から採用されていた二重口縁壺Ａがみられなくなり、二重口縁壺Ｄと、丁寧な横方向のミガキ調整を特徴とする直口壺Ｂが登場する。わずかに残存していた在来的な壺類が払拭され、周辺地域と同様な形式構成へと収束した結果ととらえられる。

続くⅧ期にはⅦ期の組成に直口壺Ｃ類が加わり、他の地域と共通した壺類の構成へ、また一歩近づくようである。そしてⅨ期は、一括資料中に複数個体を含む状況が確認できる、簡略なつくりの小形丸底壺がさらに加わる。

小形丸底壺は、Ⅶ期以降には既に存在した可能性があると考えている。なぜなら、Ⅶ期には形態的に類似した小形丸底鉢Ａ類が存在するためである。ただし、簡略化した小形丸底壺や鉢が盛行する時期は、Ⅸ期として問題はないと考える。

本稿では先行研究を参考に、口径ないしは体部最大径が器高を上回る、という筆者の基準によって両者を区別した。しかし、Ⅶ期やⅧ期の資料が少ない現状では、小形精製器種の出現時期を把握するために有効な分類ができたとは言い難い。有効な分類方法の検討は今後の課題とする。

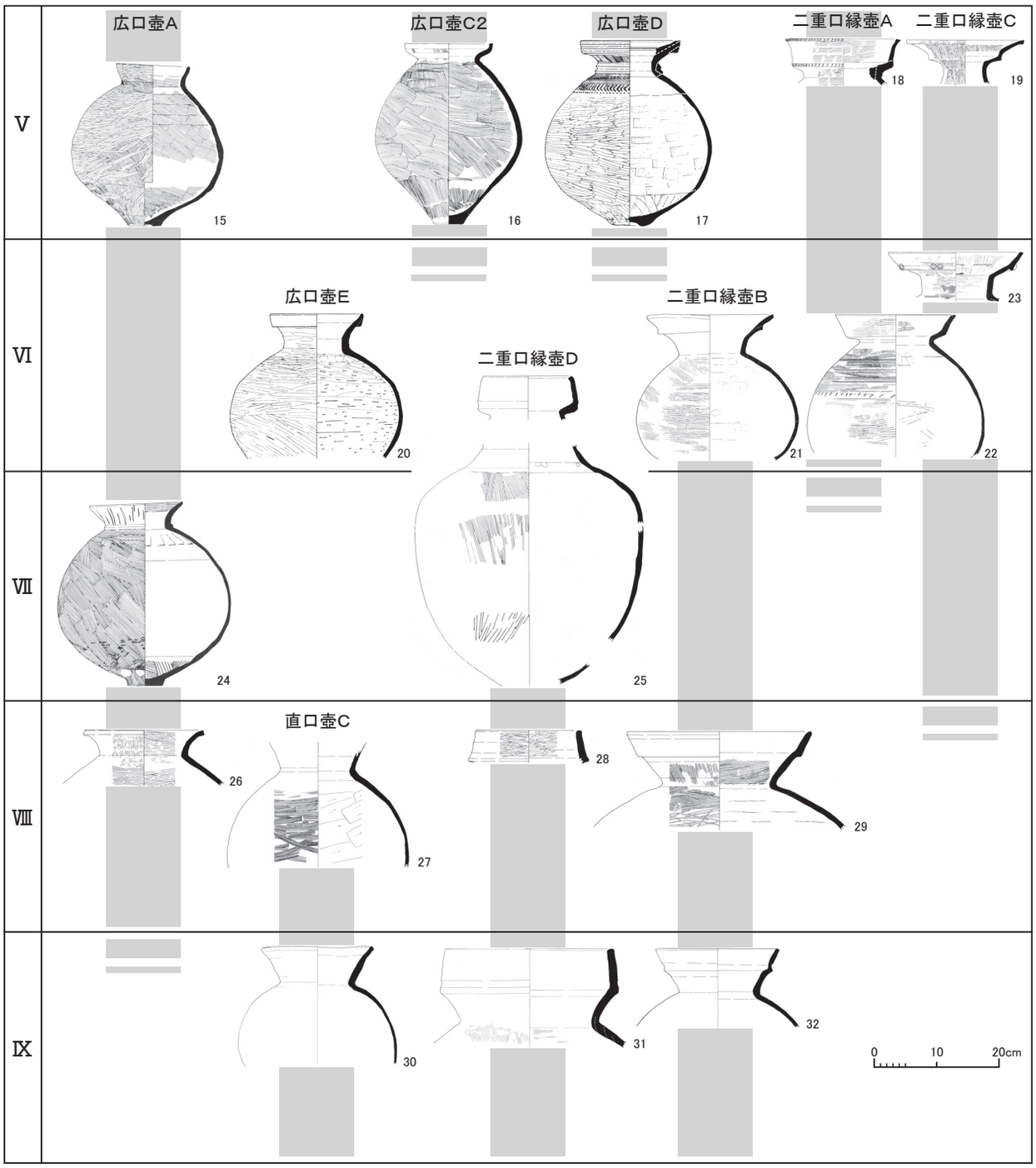

図 12　壺類の消長②

５－２．甕類の消長（図 13 ～ 16）

甕類は壺類に比べて、受口状口縁をもつ在来形式であるＡ１・Ａ２類の採用期間が長期にわたるが、それらの甕は、各遺跡で口縁部の形状や体部の施文、あるいは製作技法などに関する特徴が多様であり、甕類の変化をもとに時期的な変遷を辿ることは難しい。

Ⅰ期には、加飾した受口甕であるＡ１類のほかに、Ｄ類や他地域に系譜をもつＧ類が確認できるが、甕類の資料総数が乏しい。Ⅱ期を迎えると、Ａ類を主体とする甕類の構成が定着する。加飾しないＡ２類や口縁下端のみを加飾するＡ１類などが一定量みられるようになり、Ｇ類は衰退する。

Ⅲ期はⅡ期の甕類に加え、台をもつＢ類や北陸地域に由来するＧ類が登場する。 台をもつ甕は濃尾地域で主体的に採用されるものであり、隣接地域からの外的な影響がみられる。その一方で、Ⅱ期と同様にＡ類の採用比率は７割前後と高い（山下 2018）。

Ⅳ期は、それまで高かったＡ類の採用比率が減じる時期であり、複数系統の甕から影響を受けたと考えられる、折衷的な要素をもつ個体が多くなる。例えば、Ⅳ期から登場するⅠ類は、Ａ２類とＧ類の要素を併せもつ形式と理解できる可能性がある。

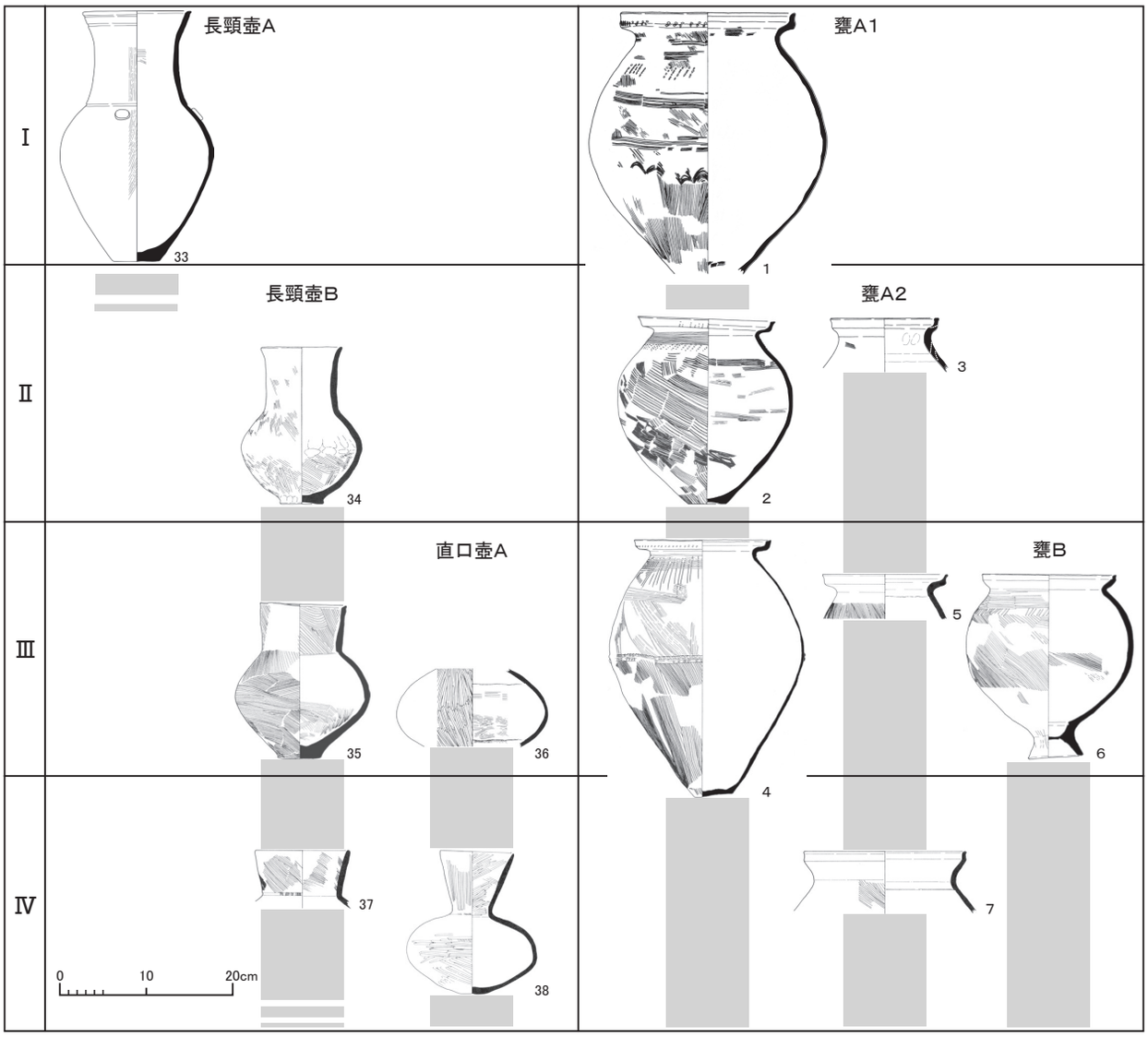

図 13　壺類の消長③　甕類の消長①

Ⅴ期に該当する一括資料は、土坑や竪穴遺構などではなく、密集して検出された土器群が多いため、出土状況の点で、きわめて良い状態とは言い難いが、全形が明らかな甕類が豊富である。Ａ１類とＢ類はⅤ期には確認できるが、Ⅵ期以降衰退してみられなくなる。同様にⅤ期で衰退する形式には、Ｈ類がある。Ⅰ類は当時期に衰退してⅧ期以降に再び現れるが、前に述べたとおり、将来的には両者を区別する必要があるだろう。

Ⅵ期は、それまで存在した複数の形式が衰退するとともに、Ｅ１類が登場する。Ｅ１類は資料数が少ないため、その出現過程を詳細に検討することは難しいが、口縁端部を内側に折り返し、水平方向か下方へ肥厚させる特徴をもつ、一般的な布留式の甕と共伴しない例がみられることや、器台で確認した前後関係に基いて、Ｅ２類が登場する以前に現れる形式として理解した。

Ⅷ期から登場する形式には、Ｅ２類とＦ類があり、それに加えてⅠ類が再びみられるようになる。これらはⅨ期まで引き継がれる。Ⅱ期に登場した加飾のない受口甕Ａ２類は、Ⅸ期まで途切れることなく採用され、対象地域の特色を示す形式であり続けた。

湖岸北半地域における当該期の甕類は、複数形式が共存しながら、様々な折衷のあり方をみせるようである。今回は検討が不十分であるが、受口状口縁甕とく字状口縁甕は、細かい属性を分析することでより詳細な消長関係を説明できるだろう。機会をあらためて検討したい。

５－３．高杯類の消長（図 17，18）

高杯類は周辺地域で採用される形式と一致するものが多く、それらの編年観を用いることで、ある程度の前後関係は把握できる。しかしながら、問題点として指摘したように、それらの諸形式の時期的な併行関係や消長については不明な点が多い。

特に、欠山型や東海系と呼ばれる有段高杯Ｄ・Ｅ類が、対象地域においてどの時期から登場し、それ以前の弥生時代後期に特徴的なＢ類やＣ類と、どのように

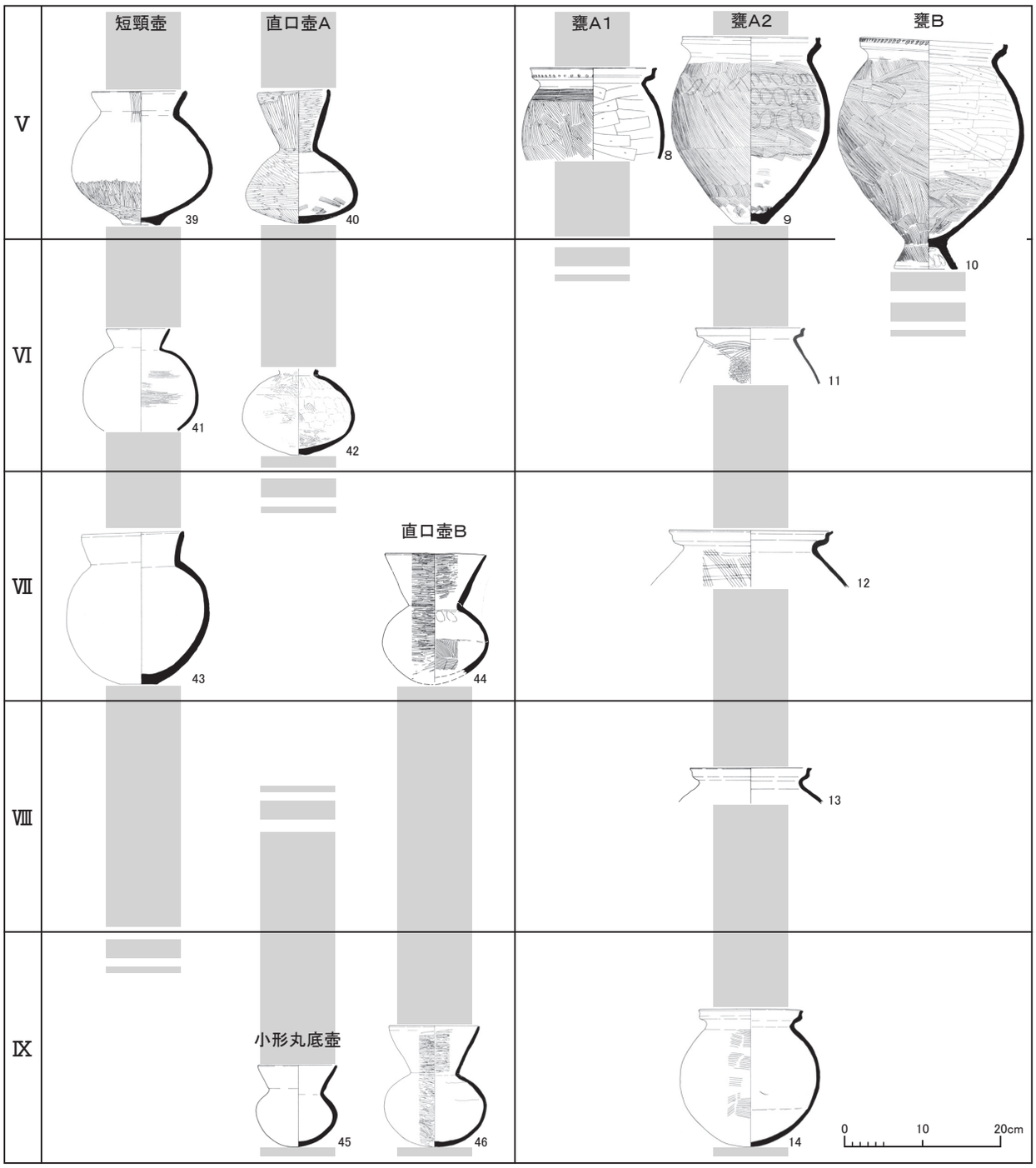

図 14　壺類の消長④　甕類の消長②

共存したのかを明らかにする必要があった。

Ⅰ期にみられる有段高杯Ａ類は、Ⅱ期になると衰退し、Ⅲ期には確認できなくなる。Ⅱ期からは口縁部が外に広がるＢ類が登場し、Ⅲ期にかけて継続的にみられる。同様に、Ⅱ期からⅢ期にかけては、椀形高杯Ａ類が普遍的に存在する。そして、Ⅲ期には有段高杯Ｃ・Ｄ類が登場する。

椀形高杯Ｂ類とした小形の高杯は、Ⅰ期からⅧ期を通じて確認できたが、すべての資料が一様ではなく、細分の余地を残している。しかし、対象資料のみでは細分案の妥当性を判断するために十分な数量が得られなかったため、今回は小形の椀形高杯の有無を示したに過ぎない。

Ⅳ期になると、全形のわかる例が見当たらないが、内彎脚をもつＥ１類が確認できる。また、Ｄ類あるいはＥ１類である、深い杯部も広くみられるようになる。

Ⅴ期は、Ⅳ期の構成にＥ２類、椀形高杯Ｃ１・Ｃ２類が加わる。続くⅥ期にも、Ⅴ期に現れたＥ２類や、椀形高杯Ｃ１・Ｃ２類がみられるが、後者はこの時期までで衰退する。また、近畿地方の編年案で有段高杯等の呼称で知られる有段高杯Ｇ類が登場するが、次の時期へは続かず、一時的な採用に止まるようである。

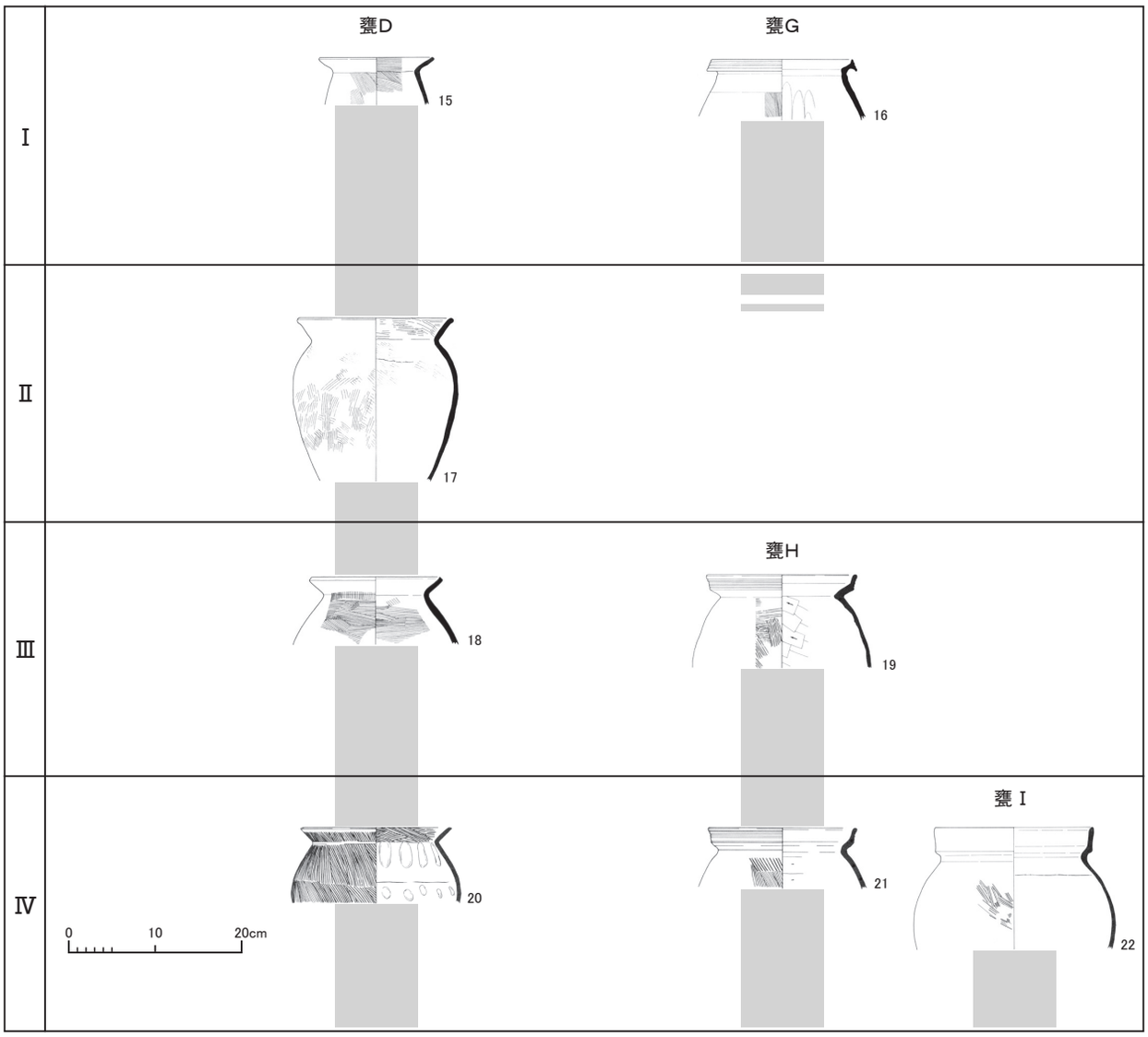

図 15　甕類の消長③

Ⅴ期以降に高杯類の主体となるＥ２類は、Ⅶ期以降に衰退するが、Ⅶ期以降は新たに採用された有段高杯Ｆ類を主体とする構成へと変化する。Ｆ類の展開様相について、形式細分によって明らかにできる可能性を残すが、良好な資料に基づいて検証することが現状ではできなかった。Ⅸ期にみられる有段高杯Ｆ類は、横方向のミガキ調整を省略する粗雑なものになる。

５－４．鉢類の消長（図 19，20）

Ⅰ期は受口鉢Ａ類のみであったが、Ⅱ期以降になると様々な鉢類がみられるようになる。受口鉢Ｂや有孔鉢、片口形土器がⅡ期から現れ、Ⅲ期には手焙形土器が登場する。

Ⅳ期になると、Ⅲ期の構成に内彎口縁鉢が加わる。続く時期もこの組み合わせは維持されるが、受口鉢Ｂを除く形式はⅤ期までで衰退し、Ⅵ期には受口鉢Ｂのほかに有段口縁鉢Ａを加えた新しい傾向がみられる。なお、検証が不十分ではあるが、Ⅰ期からⅤ期にかけて存在する受口鉢Ａ・Ｂ類は、時期が下ると扁平化する傾向がある。

Ⅶ期以降は小形化の進んだ、小形丸底鉢Ａ・Ｂ類がみられるようになり、器台の小形品とともに、当期の土器構成を特徴づける要素としてとらえられる。Ⅷ期に確認された有段口縁鉢Ｂは、類例の総数が少なく、消長については不明瞭な部分を残している。

Ⅸ期の小形丸底鉢は、精製品もあるが大部分が調整等を省略したＡ２類である。これらは、小形丸底壺と同様に、当該期の一括資料のなかに複数点がみられる。

鉢類は、Ⅴ期とⅥ期の間で、近江地域独自の形式である受口鉢Ａ類や手焙形土器など、複数形式の衰退がみられ、画期が認められる。また、Ⅶ期の小形品への収束は、器台の変遷と連動していると理解でき、器台と同じく大きな画期ととらえられる。

５－５．小結

各時期に対応する一括資料を表に示した（表５）。

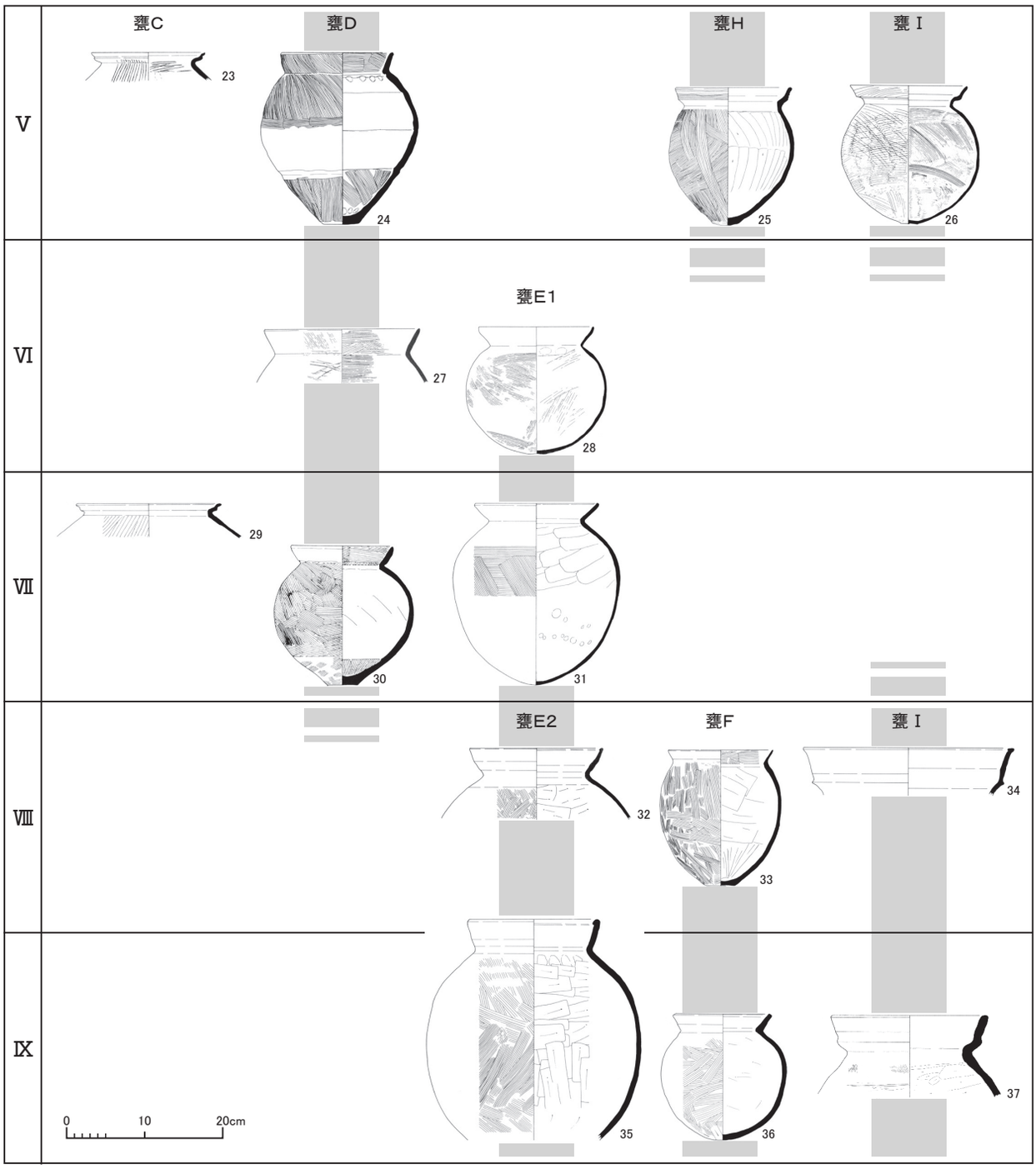

図 16　甕類の消長④

前項までにみてきた各形式の消長を整理すると、以下のとおりである。

Ⅰ期を特徴づける形式には、有段高杯Ａ類や、長頸壺Ａ類、器台Ｏ類などがあるが、これらを確認できる遺構は多くない。湖岸北半地域では、続くⅡ期からⅤ期にかけて良好な一括資料が多数みられるようになる。

Ⅱ期は、器台Ａ類が登場するとともに、広口壺Ｃ類や甕Ａ類、そして受口鉢等、近江地域の特色を色濃く示す形式が主体的に採用される。Ⅲ期にも同様な傾向がみられ、器台Ｂ類の盛行や手焙形土器の顕在化は、独自の形式が展開する様子を表している。

その一方でⅢ期は、濃尾平野に系譜をもつ広口壺Ｄ類、甕Ｃ類、有段高杯Ｄ類や、北陸地域に由来する甕Ｇ類の存在から、外来系の形式が一定量みられる点が重要である。

Ⅳ期になると、外来系の要素のなかでも濃尾地域の影響が一層強くなるようである。特に高杯類は、濃尾地域と形式の共有がみられ、Ⅳ期に登場する器台Ｄ類の内彎脚も、高杯Ｅ１類との親縁性が推定できる。

Ⅴ期は新たに二重口縁壺Ｃ類や器台Ｅ類が現れるが、それまでに盛行した在来形式や、外来系でありながら定着した形式はこの時期までで衰退するものがい

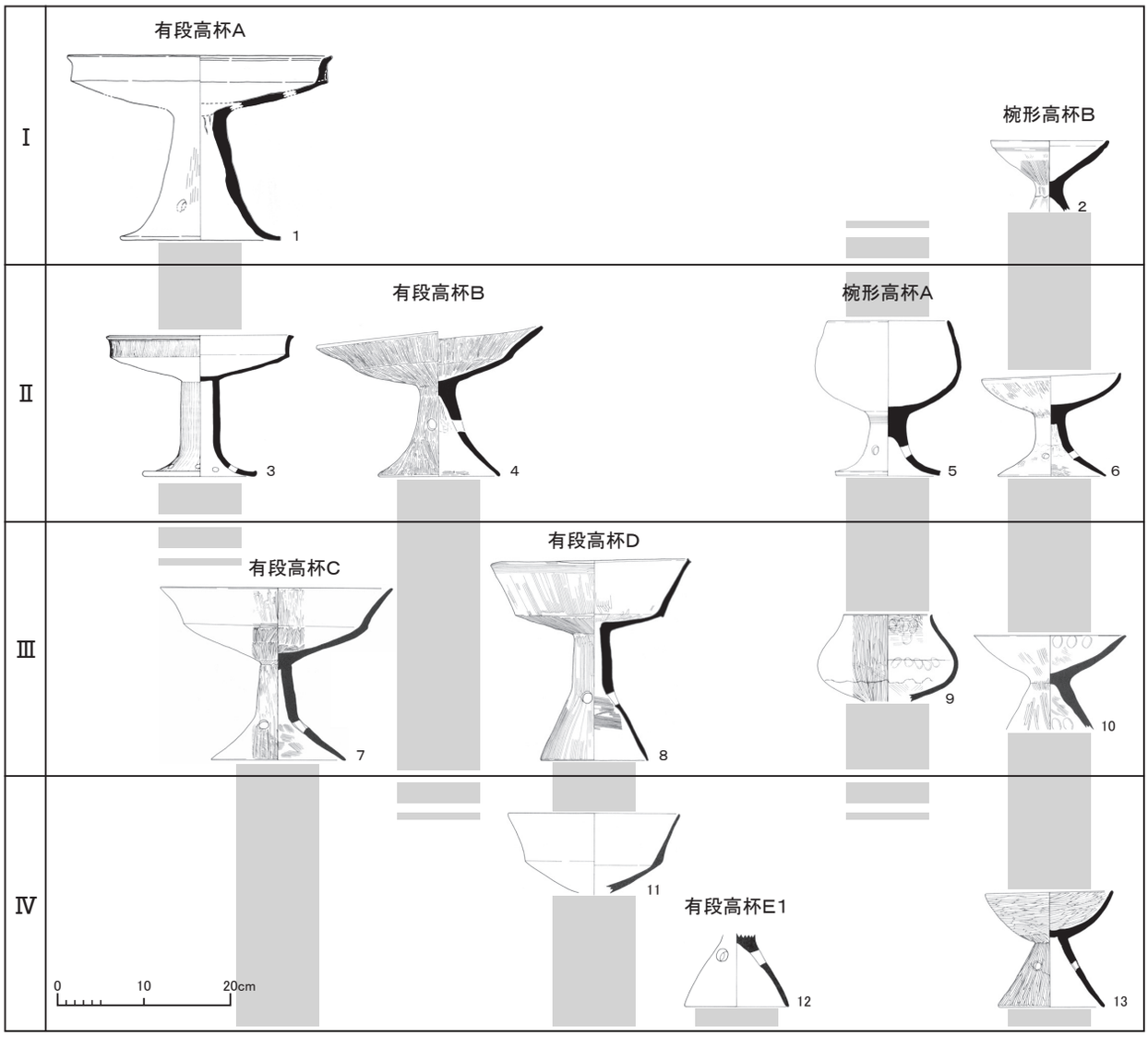

図 17　高杯類の消長①

くつも確認できる。なお、Ⅴ期は器台に基づく細分が困難であったが、そのほかの要素を理由としてさらに二小期に分けられる。

十里町１号方形周溝墓および柿田ＳＨ 03 出土資料にみられる高杯Ｅ類は、明瞭に内彎する深い杯部のもののみで構成され、堀部西遺跡落ち込みや、正伝寺南土器群７に確認されるＥ類に比べて、古い要素をもつことが先行研究より認められる（赤塚 1990）。また、層位的な新旧関係から正伝寺南土器群 11 が土器群６・９・10 に先行することが指摘される[14)]。

詳細な検証は十分ではないが、以上の根拠により、十里町１号方形周溝墓、柿田 SH03、ならびに正伝寺南土器群 11 をⅤ期古相、柿田 SH54、正伝寺南土器群２・６・9・10 をⅤ期新相として理解した。堀部西遺跡落ち込みと正伝寺南土器群７については、他の資料と比べた場合、一括性が良好とは言い難いため、二小期にまたがる資料と判断した。

Ⅴ期とⅥ期の間には、器台・壺・甕・鉢類に大きな画期を見出せる。器台は口径が脚径を下回る小形のＧ・Ｈ・Ｉ類が採用され、それまでみられた中・大形品が一挙に衰退する。前時期からの連続性をとらえることが難しい二重口縁壺Ｂ類や甕Ｅ類、有段口縁鉢Ａ類などが採用され、地域的な独自性を示していた形式の多くがほとんどみられなくなる。

それまでの時期に比べ、Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ期の良好な資料は多くないが、それぞれの間にみられる土器の変化は決して小さくない。Ⅶ期は、器台Ｊ類、二重口縁壺Ｄ類、直口壺Ｂ類、高杯Ｅ類、小形丸底鉢Ａ・Ｂ類などが新たに登場し、Ⅵ期に著しく衰退した地域色は、甕Ａ２類や受口鉢Ｂ類を除いて確認できなくなる。

新たに採用された形式は、いずれも周辺地域で広く採用されるものであり、湖岸北半地域が、近江地域独自の土器様相を脱し、広範な地域に及ぶ新しい土器様相を受容した段階ととらえることができよう。

Ⅷ期も資料は少ないが、直口壺Ｃ類や有段口縁鉢Ｂ類が加わることで、さらに土器構成にみられる周辺地

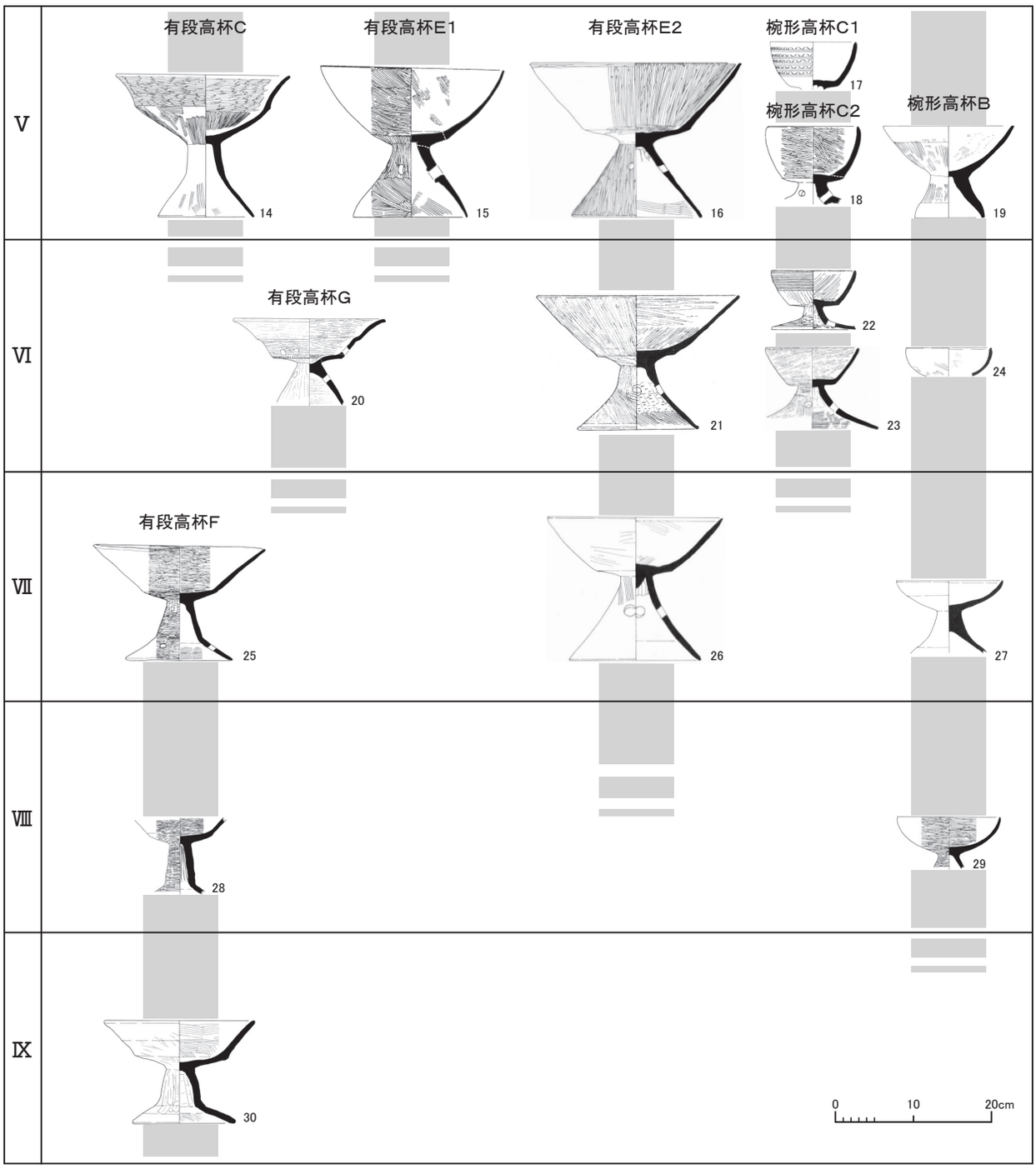

図 18　高杯類の消長②

域との共通性が高まる状況がうかがえる。また、器台類がみられなくなるⅨ期に盛行する、粗製の小形丸底壺や小形丸底鉢Ａ２類も、他地域の変化と連動していることが推定される。

６．考察

６－１．先行研究との対応関係（表５）

本稿で設定した各時期は、先行研究で示されてきた編年案とどのように対応するのであろうか。はじめに、琵琶湖沿岸の他地域を対象とした既存の編年案と比較をおこない、次に、周辺地域との対応関係を検討する。

６－１－１．近江地域内における対応関係

琵琶湖沿岸地域の編年案は、湖南地域を対象とした伴野幸一による成果（伴野 2000；2006）を用いた[15]。

伴野が、弥生時代後期の最も古い段階とする「Ⅴ期古相」の基準資料である守山市服部遺跡ＳＤ－201出土資料には、有段高杯Ａ類や大形の長頸壺、器台Ｏ類が確認でき、本稿のⅠ期に対応すると理解できる。

次の「Ⅴ期中相」は、Ⅱ期に併行すると推定できるが、湖南地域の受口甕に現れる、装飾に関する特徴は本稿の対象地域では明瞭ではない。また、この段階の新相に加入するとされる手焙形土器についても、Ⅱ期

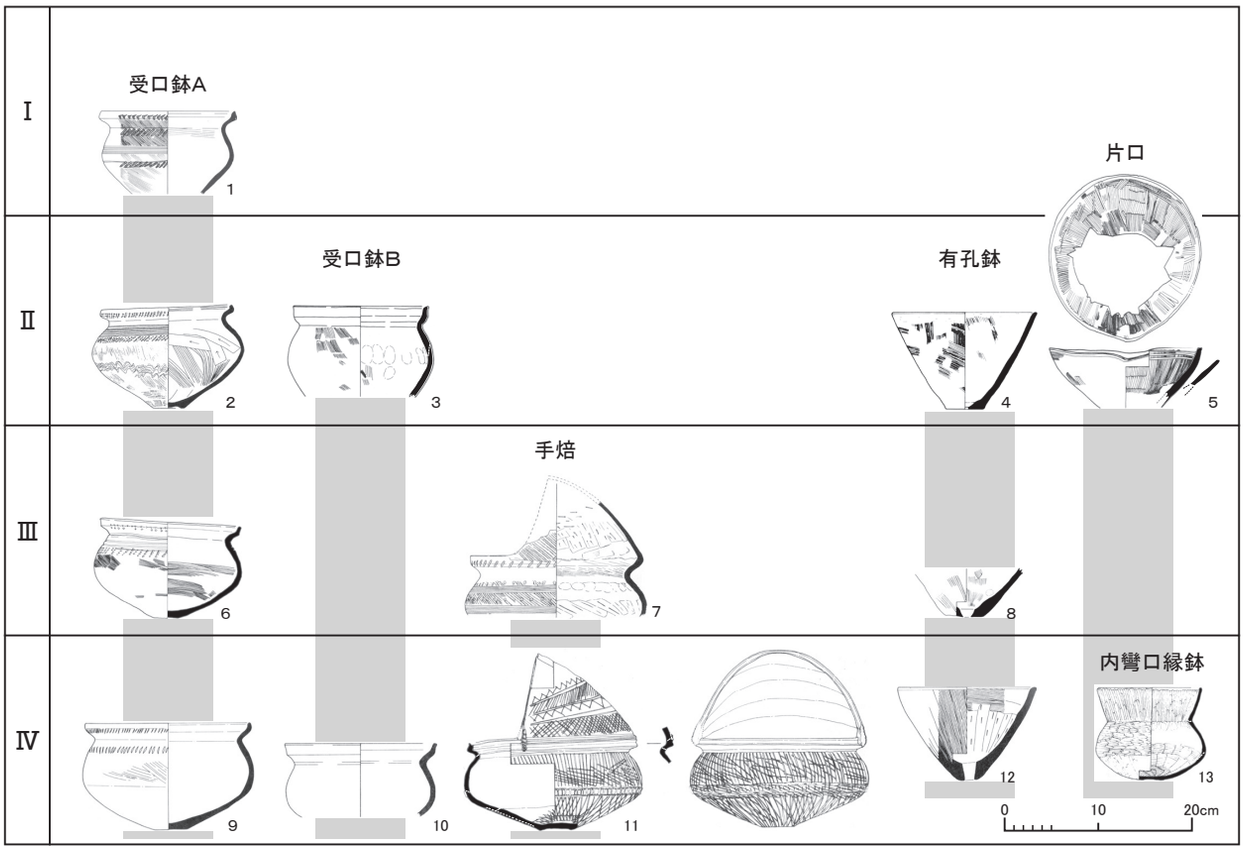

図 19　鉢類の消長①

には認められない。ただし、体部の絞りが強くなるという器台の変化や、その後の段階の様相をふまえれば、Ⅱ期に接点を多くもつ時期ととらえられる。

「Ⅴ期新相」は、前段階に成立した器種構成が維持され、そこに二重口縁壺が加わる。高杯の脚部形状と共通であると理解される、「円錐状の脚中部から緩やかに開脚する」脚をもつ器台は、本稿の器台Ｂ類である。湖南地域でみられる二重口縁壺と、本稿の二重口縁壺Ａ類との関係性に検討の余地は残すが、器台等を根拠にⅢ期に併行すると理解できる。

「Ⅵ期」は長頸壺の消滅や、口縁部を飾る広口壺がみられなくなる点を指標とするほか、受口甕が櫛描文から箆描文で加飾されるようになる点を重要な変化としてあげている。長頸壺の消滅は確認できなかったが、衰退する点は、本稿のⅢ期とⅣ期の間にも認められる。また、他地域の甕が搬入されたり、東海地域の形式が土器構成に含まれたりなど、交流の活性化が指摘され、Ⅳ期にみられた東海地域の影響や、Ⅴ期の甕類にみられる傾向と一致する。

「Ⅵ－１期」は、濃尾平野に系譜をもつ杯部の深い高杯が湖南地域の野洲川流域では主流を占めるようであり、これは本稿のＥ１類に対応すると考えられる。また、当該期の特徴の一つとされる箆描沈線文を施す手焙形土器は、十里町遺跡３号方形周溝墓出土資料に（図 19 － 11）みられることなどから、「Ⅵ－１期」はⅣ期に対応する可能性が高い。器台に、小形化の兆しがみられながらも、次の「Ⅵ－２期」で本格的に小形のものが現れるといった点も、本稿のⅣ期とⅤ期の差に近しいととらえられる。

「Ⅵ－２期」には、逆台形の内彎して立ち上がる杯部をもつ、小形で低脚の高杯がみられるようになり、本稿の椀形高杯Ｃ類と理解できる。また、伴野が小形器台Ｃ－２とした短い杯部とハの字に開く脚部を特徴とする器台は、本稿の器台Ｅ類との類似が認められる。それらの形式が確認できることから、この時期はⅤ期におおむね併行すると考えられる。

「Ⅶ期古相」は、弥生後期に系譜をもつ高杯、器台、浅鉢などがみられなくなるとともに、小型の器台や壺が出現する点に注目して設定される。また、庄内式・布留式傾向甕の存在など、前段階と異なる様相を示し、この状況は、本稿のⅤ期とⅥ期の画期にみられた変化と共通点が認められる。

「Ⅶ－１期」の特徴として説明される、弥生後期以来の高杯が消滅し、濃尾平野に系譜をもつ高杯が残存する様子は、前者が本稿の高杯Ｂ類やＣ類にあたり、後者が高杯Ｅ２類と理解でき、Ⅵ期の特徴と合致する。本稿で高杯Ｇ類とした形式が登場する点も共通している。この時期の器台類に関しては、湖南地域と湖岸北半地域で形態的な類似点はそれほど認められないが、小形品に集中する点は等しい傾向といえる。

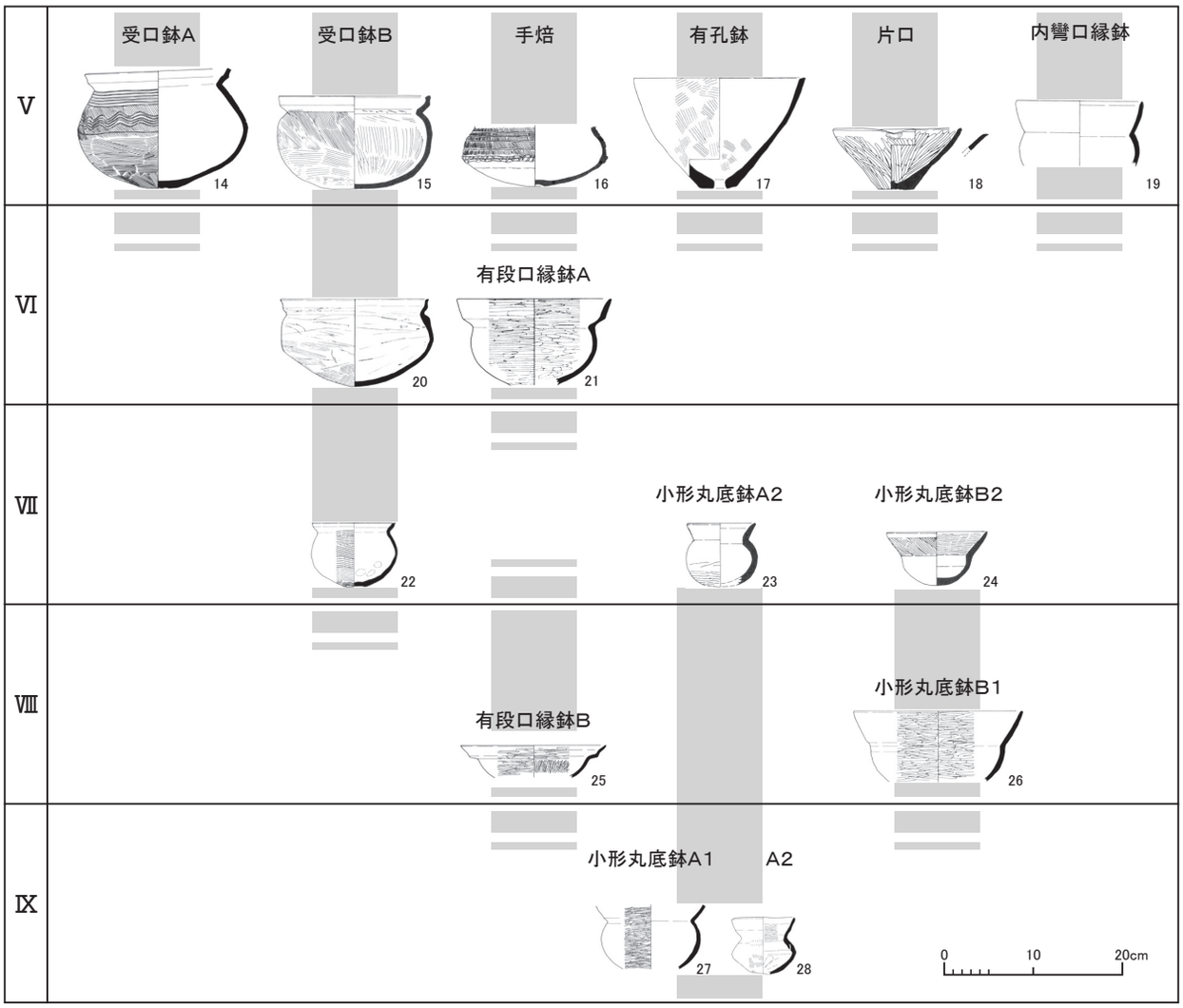

図 20　鉢類の消長②

湖岸北半地域と同様に、湖南地域でもⅦ期以降の資料は乏しいようであり、特に「Ⅶ－２期」は良好な資料の提示が少ない。「Ⅶ－２－１期」は、本稿の甕Ｅ２類にあたる口縁端部を肥厚させた甕や、器台Ｊ類を指標の一つとしている。本稿のⅦ期ではＥ２類を確認できていないが、両者は近い時期と考えてよいだろう。

「Ⅶ－２－２期」は、高杯にみられる細く絞られた脚柱部から鋭角気味に裾部へと移行する形状や、小形の器台など、紹介された資料の比較から類似点を示すことしかできないが、Ⅷ期に確認できる資料を含む。湖南地域も湖岸北半地域も資料数が少ないため、良好な資料の蓄積に基づく今後の検討が期待される。

具体的な資料の提示はされていないが、伴野は続く時期まで土器の構成内容を述べている。「Ⅶ－３期」は、直口壺の登場や布留式甕の定着、そして「小型精製３種」が出そろう時期と説明する。それぞれを、直口壺Ｃ類、甕Ｅ２類、そして有段口縁鉢Ｂ類の登場と解釈してよいならば、この時期が本稿のⅧ期と対応すると考えられる。

琵琶湖を介して隣接する湖南地域とは、ほぼ同様の変遷や画期を見出すことができた。このことは、本稿で実施した器台を中心とした段階設定が、対象地域の土器を編年するうえで、有効な方法であったことを示唆していると理解できよう。

６－１－２．周辺地域との対応関係

本稿で示した編年案は、濃尾平野を対象とした編年と対比できる部分が多いため、既に検討が重ねられてきた八王子古宮式や山中様式（赤塚 2002）、廻間様式（赤塚 1990）、松河戸様式（赤塚 1994；赤塚・早野 2001）の内容との比較を中心的な作業として併行関係を明らかにする[16)]。

八王子古宮式の基本器種と理解される「盤状高杯」、「小型盤状高杯」は、本稿の有段高杯Ａ、椀形高杯Ｂに対応するものでありⅠ期に確認できる。同様に八王子古宮式の土器構成に含まれる、「近江湖南型平底甕」ならびに「近江湖南系有段口縁鉢」も本稿の甕Ａ１、鉢Ａに対応する。

表４　各図土器の対照一覧

時期	地域	遺跡・遺構名	器台（10）	壺（11～14）	甕（13～16）	高杯（17,18）	鉢（19,20）	文献
Ⅰ	湖北	大塚ＳＢ1008		1	1	1		16
		越前塚ＳＸ08		2				14
	湖西	針江北ＳＤ－29				2	1	4
		弘川竪穴住居10						8
		弘川竪穴住居11	1		15,16			8
		南市東半円形状遺構		33				1
Ⅱ	湖北	大塚ＳＢ0003	2		2,3		3,5	15
		法光寺ＳＢ－05	3	3			2	9
		法光寺ＳＢ－08		4,34				9
		法勝寺ＳＸ20		5		5		22
	湖西	南市東ＳＢ0707				3	4	2
		弘川竪穴住居５						8
		弘川常盤ＳＨ－11			17	4,6		7
Ⅲ	湖北	大辰巳ＳＤ－04	4,6	9,35	4,6,18	8	6	14
		越前塚ＳＸ15					7	13
	湖西	針江北ＳＨ－１	5	10,36	5,19	9	8	4
		針江北ＳＫ－25		6,8		7		4
		針江北土器群Ａ		7		10		4
Ⅳ	湖北	十里町３号方形周溝墓		11			11,13	11
		十里町４号方形周溝墓	7					11
		桜内79SB57		12	7,22		9,12	10
		桜内85ＳＢ２	8,9	13,37,38		11,12		10
	西	正伝寺南土器群３		14	20,21	13	10	3
Ⅴ	湖北	十里町１号方形周溝墓		17				11
		柿田ＳＨ03				19	15	17
		柿田ＳＨ54			26			17
		堀部西落ち込み	10,14	18,19	23	15,17,18	17,19	20
	湖西	正伝寺南土器群11		15	8,9			3
		正伝寺南土器群２		16,39	10			3
		正伝寺南土器群６					14	3
		正伝寺南土器群７	11,12,13,15		24			3
		正伝寺南土器群９		40		14	16,18	3
		正伝寺南土器群10			25	16		3
Ⅵ	北	越前塚ＳＸ55	16	20		21	20,21	13
	西	弘川常盤ＳＨ－１	17,18,19	21,22,23,41 42	11,27,28	20,23,24		7
Ⅶ	湖北	森前E・北部（溝）	23	44		25,27	22	12
		黒田ＳＸ01	20,21,22	24,25,43	12,29,30,31	26	23,24	23
Ⅷ	湖西	針江川北ⅡＳＸ４土器群Ｂ （森浜土坑２－１）	24	26,27,28,29	13,32,33,34	28,29	25,26	5 6
Ⅸ	北	国友沼沢地		30,32,46	14		28	12
	湖西	針江川北ⅡＳＸ４土器群Ａ			35,36	30	27	5
		弘川常盤ＳＨ－５		31				7
		弘川常盤ＳＨ－８		45	37			7

以上の理由から、両者がほぼ併行すると理解したが、大塚遺跡ＳＢ 1008 の有段高杯Ａ（図 17 － 1）をみると、脚部が直線的に開き、八王子古宮式の後半にあたる八王子古宮Ⅱ式にみられる特徴をもつといえる。したがって、Ⅰ期とした資料のなかには多少時期が遅れる要素をもった資料が含まれるが、Ⅰ期の資料が湖岸北半地域にそれほど多くないため、詳細な時期の判断は難しい。

八王子古宮Ⅰ式では、施文が多段におよぶ「近江湖南型平底甕」が甕の主体を占めるようであるが、湖岸北半地域ではそのような状況は認めにくい。八王子古宮式の類例が尾張平野で十分に蓄積されていない実状もあり、両地域における類例の蓄積を待って再び検討する必要がある。

Ⅱ期からみられる有段高杯Ｂは、湖岸北半地域では杯部や脚部が加飾される例が少ないが、赤塚が山中式誕生の指標ととらえる、「山中型高杯Ｂ類[17)]」に該当するものと理解できる。Ⅲ期の大辰巳遺跡ＳＤ－ 04 出土資料のなかには、廻間Ⅰ式０段階に登場する、「内彎志向の有段高杯（八王子型）[18)]」が確認でき（図 17 － 8）、両時期の接点を見出すことができる。それらの高杯から、Ⅱ期が山中式に、Ⅲ期が廻間Ⅰ式０・１段階に対応すると考えられる。

Ⅳ期は有段高杯Ｄ類の残存と、Ｅ１類の登場という点において、廻間Ⅰ式２段階およびそれ以降の後半に位置付けられると理解した。Ｅ１類は図 17 － 12 のような短い脚部がみられ、低脚化が認められるため、廻間Ⅰ式の後半段階までを含むと判断できる。また、赤塚が廻間Ⅰ式２段階に関して指摘した、「小型品以外では内彎脚が主体となる」（赤塚 1990：pp.88）傾向は、本稿で指標とした器台Ｄ類の登場にも合致している。

表 5　他地域の編年案との併行関係

中河内	近江		濃尾		加賀
西村	伴野（湖南）	本稿（北半）	赤塚	早野	田嶋
弥生後期 前半 新段階	Ⅴ－古	Ⅰ	八王子古宮式		
弥生後期 前半 古段階	Ⅴ－中	Ⅱ	山中式 1 2		
弥生後期 後半 中段階	Ⅴ－新 5 6	Ⅲ	廻間Ⅰ式 0 1 2 3 4	早１期	２群
庄内式 新段階	Ⅵ－１	Ⅳ		早２期	３群
庄内式 古段階				早３期	４群
庄内式 中段階	Ⅵ－２	Ⅴ	廻間Ⅱ式 1 2 3 4	早４期	５群
庄内式 新段階				早５期	６群
布留式 古段階 古相	Ⅶ－１	Ⅵ	廻間Ⅲ式 1 2 3 4	前１期	７群
布留式 古段階 新相	Ⅶ－２－１	Ⅶ		前２期	８群
布留式 中段階 古相	Ⅶ－２－２			前３期	
布留式 中段階 中相	Ⅶ－３	Ⅷ	松河戸Ⅰ式 1 2 3 4	前４期	９群
布留式 中段階 新相				前５期	10群
布留式 新段階 古相		Ⅸ			11群

先行研究では、廻間Ⅰ式４段階の前後に大きな画期を見出す取り組みがあるため（早野 2011, 2013；田嶋 2013 など）、併行する時期を明確にすることは重要であるが、Ⅳ期の細分についてはあらためて資料を集めたうえで臨みたい。

続くⅤ期の堀部西遺跡落ち込み出土資料をみると、内彎した深い杯部をもつＥ１類（図 18 － 15）には古い要素が確認できるが、Ｓ字甕Ｂ類[19]に該当する、甕Ｃ（図 16 － 23）が伴う。したがって、廻間Ⅱ式期におおむね併行する資料と考えられる。

Ⅵ期に関する濃尾平野の編年案等との対応関係については多少検討が必要である。廻間Ⅲ式の指標の一つとされる、Ｓ字甕Ｃ類[20]の存在は確認できないが、別の指標である、大きく外彎状に開く脚部をもつ精製化した高杯は、越前塚遺跡ＳＸ－ 55 出土資料[21]の、有段高杯Ｅ２（図 18 － 21）にみられる。この点の解釈については、早野浩二による編年案（早野 2011）を参照してみたい。

早野は廻間式の再検討をおこない、赤塚の廻間Ⅱ式４段階と廻間Ⅲ式１段階にわたる二時期を前１期として再設定した。早野は前Ⅰ期の指標として、Ｓ字甕Ｂ類新とＳ字甕Ｃ類古の混在や、小型器台の盛行、長頸壺の著しい減少や形状の退化などをあげるほか、「各器種とも形態の内彎傾向がほぼ消失し、有段高杯の脚部は外反する形状に変化する」ことを指摘する（早野 2011：pp.99）。なお、ここで言及される長頸壺は本稿の直口壺Ａ類に含まれる類の形式と理解できる。

この見解をふまえれば、本稿のⅥ期は、器台の小形品が盛行することや、越前塚ＳＸ－ 55 の高杯の存在を根拠として、おおよそ早野の前１期に併行すると理解してよいだろう。

続くⅦ期とⅧ期は、当該地域において良好な資料が著しく減じる時期である。継続的な検討が必要であるが、現時点で周辺地域で報告される資料と対応させるならば、Ⅶ期と理解した森前遺跡Ｅ・北部（溝）出土資料（図 10 － 23，図 14 － 44，図 18 － 25）は、近年あらためて紹介された和田廃寺下層資料（若杉・田中 2015）との類似が注目される。両者には、杯部と脚部に横方向のミガキ調整を施す、屈曲して裾部へ移行する柱状脚をもつ高杯や、同様の細かいミガキ調整で仕上げる直口壺、端部を屈曲、直立させた口縁部と直線的な脚をもつ小形の器台が共通してみられる。

同じくⅦ期とした黒田遺跡ＳＸ 01 出土資料は、器台が小形品で構成されるうえに、新たな形式の小形丸底鉢Ｂ類（図 20 － 24）が、赤塚のＳ字甕Ｃ類とみられる甕Ｃ（図 16 － 29）と共伴している。そのことからＳ字甕Ｃ類が主体的となる、廻間Ⅲ式２段階以降にあたると考えられる。また、黒田ＳＸ 01 の小形丸底鉢Ｂ２類は、ミガキ調整を丁寧に施す精製器種ではないが、在来形式に同様な形状のものはないため、河内や大和地域にみられる精製品の小形丸底鉢の影響を受けて登場したものと理解してよいだろう。

黒田ＳＸ 01 資料は、先行研究で一括資料として扱われる機会が多いため本稿でも採用したが、本稿の分析の結果、前後の時期に所属する土器を少なからず含むと理解できた。そのため、本来であれば、基準資料として用いることは避けたいが、当該期に所属する資料の不足から扱うことにした。そのような問題はあるとしても、その中心的な時期は、上記の資料等の存在からⅦ期であると考えられる。今後も同時期の資料を補う努力を続けたい。

Ⅷ期も引き続き基準となる資料が少ないが、精製品である器台Ｊ類（図 10 － 24）、有段口縁鉢Ｂ類（図 20 － 25）、小型丸底壺類の盛行と、口縁端部を肥厚させる甕Ｅ２類が定着、普及する様子を根拠として、先行研究のなかに位置付ける。同様の資料は上ノ井出遺跡ＳＤ 031、藤原宮内裏東外郭ＳＤ 912、ＳＤ 914（安達・木下 1974）及び、小若江遺跡出土資料（坪井 1956）と考えられ、その位置づけは布留式中段階（森岡・西村編 2006）の後半に該当すると判断できる。

Ⅸ期になると、良好な一括資料とはいえないまでも、前段階に比べて資料数は格段に増加する。粗製化した小形壺の急激な定着を理由に、上ノ井出遺跡ＳＥ 030 下層出土資料（安達・木下前掲）に代表される時期ととらえる。布留式新段階（森岡・西村編 2006）の前半および、松河戸Ⅰ式後半（赤塚 1994）

に併行すると考えられる。

針江北遺跡ＳＸ４土器群Ａや国友遺跡沼沢地などの土器群は、具体的な遺構に伴わない遺物であるため、前後の時期の遺物を含む可能性は否めない。特に、高杯と小形の壺や鉢類の粗製化が進んでいるため、後続する時期に属する資料を一部含む可能性がある。また、高杯の詳細な分類等による今後の検討の余地を残している。

以上に述べた併行関係を示したものが表５である。説明を加えた部分以外の併行関係については、最近の早野浩二や市村慎太郎の研究成果を引用した（早野 2011；2013，市村 2019）。

６－２．編年上の画期

ここまで、器台形土器の変遷を軸に琵琶湖沿岸北半地域の相対的な時期変化を明らかにしてきたが、その変化には、器台以外の土器を含めた土器構成上の重要な画期を示すものが存在した。また、他地域との併行関係を検討したことで、地域を超えた変化の連動性や傾向が垣間見えた。最後に、いま一度画期を整理することで、それらを確認するとともに、解釈を深めたい。

湖岸北半地域の土器編年上、比較的大きな画期がⅠ期とⅡ期、Ⅴ期とⅥ期の間に認められ、それに準ずる画期がⅡ期とⅢ期、Ⅵ期とⅦ期の間に認められた。

Ⅰ期とⅡ期の間には、地域的な独自性の強い形式の採用および定着が生じる。それらは、その後の数時期にわたり展開、採用されるものが多く、範囲は湖岸北半地域のみならず、湖岸一帯で共有される傾向にある。代表的なものは、器台Ａ類や甕Ａ類、受口甕等であり、継続的かつ主体的な採用がみられる。

これに対して、Ⅴ期とⅥ期の画期は、Ⅱ期に確立した土器構成からの脱却を意味し、地域的な形式がことごとく衰退する。この動きのなかで、中・大形の器台および、受口鉢Ａ類、手焙形土器などの鉢類、甕Ａ１類など、対象地域の在来形式が廃止されていく。

このように、Ⅵ期はそれまでと全く異なる土器構成へ変容したようにみえるが、一方で、選択されて残存する形式も少なくない点について気に留めなければならない。器台Ｆ類や高杯Ｅ２類、二重口縁壺類などは、Ⅱ期から存在する形式ではないが、Ⅴ期には既に対象地域内に定着していたものである。また、甕Ａ２類や受口甕Ｂ類は、Ⅱ期から存在するが、Ⅵ期以降も確認できる。そのような選択がおこなわれた背景を考える必要があるだろう。

上の二つの画期ほどではないが、Ⅱ期とⅢ期の間には、Ⅳ期、Ⅴ期にかけて展開していく濃尾平野に系譜をもつ形式が登場する点で、意義を見出したい。Ⅲ期は、地域色の盛行期でありながら、特定地域との積極的な交流がみられ、その地域とは、第一に濃尾平野、第二に北陸地域となるだろう。このような傾向は、先に述べたように湖南地域でもみられる。

Ⅱ期からⅢ期が、前兆としての変化ととらえられるのに対し、Ⅵ期からⅦ期の変化は、余波と理解できるかもしれない。Ⅵ期に成立した新たな土器構成に加え、広範な地域で採用される器台Ｊ類や小形丸底鉢Ｂ類、直口壺Ｂ類などの新器種が登場し、周辺地域との差が見出しにくい土器構成へと一層変化する。この画期を経た後は、Ⅷ期、Ⅸ期と周辺地域と足並みをそろえるように変化が続き、そのことが、Ⅶ期以降の土器構成を大和盆地と対応させることを可能にする。

以上に、画期に生じた土器構成の変化とその意味を説明したが、Ⅵ期の変化に関しては、Ⅴ期の様相から連続的にとらえることで、よりその重大性が注目されるだろう。

Ⅴ期は、外来系の壺類や甕類が確認され、特に甕は他地域から搬入された例や、複数地域の特徴を併せもった折衷的な例が目立つ。この背景には、甕を携えて地域間を大規模に移動する人びとの存在が推定でき、その移動活動が、Ⅴ期からⅥ期への変動を引き起こす契機となったととらえることは難しくない。このⅤ期からⅦ期にかけてみられた状況は、他地域を対象とした次のような研究とも一致がみられる。

小松市漆町遺跡出土土器の分析に基づき、編年案を示した田嶋明人は、在地系土器群の払拭を特徴とする「漆・７群土器」の前段階にあたる「５・６群土器」に地域間交流の進展にともなう外来系土器群の波及と、在地系土器群の変質、解体期としての評価を与える（田嶋 1986）。特に「漆・６群」に対しては、「外来系甕形土器の無秩序ともいえる増加・併存」（田嶋前掲：pp.135）が認められる土器群と形容する。

田嶋による一連の評価は、本稿のⅤ期からⅥ期への変化内容に類似すると理解でき、先に示した併行関係をみても対応する時期と考えられることから、連動性を認めることができる。ただし、７群土器群にみられるとされる外来系土器群の主体性など、本稿のⅥ期とは完全に一致しない部分もあり、注意を要する。

このように土器構成が大きく変化する背景を考えるためには、土器による変遷を示した後に、対象地域内の集落等にみられる変化を明らかにし、両者を総合的に解釈する必要がある。本稿では、集落の検討までは達成できなかったが、先行研究をもとに若干の考察を加えたい。

松室孝樹は、湖北地域にあたる姉川左岸地域の遺跡を対象に、変遷とその画期について検討をおこなっている（松室 1998）。検討のなかで松室は、柿田遺跡、上寺地遺跡、墓立遺跡、堀部西遺跡などの複数遺跡が、

「庄内式古相」に活動を開始すると指摘する。さらに、この時期を契機とする遺跡の増加傾向は、長期的ではなく、「庄内式新相後半」以前に、大半の遺跡が活動を沈静化させるとも述べる。

松室が使用した時期区分を本稿の編年とどのように対応させるかという問題はあるが、おおむね、「庄内式古相」が本稿のⅣ期、「庄内式新相」が本稿のⅤ期からⅥ期に該当すると考えられる。その場合、松室が指摘した遺跡の増加と沈静化は、前者がⅣ期とⅤ期を通じてみられた、濃尾平野由来の形式を中心とした外来系形式の流入や定着にあたり、後者がⅥ期にみた既存の土器構成からの刷新に対応すると理解が可能であり、直接的な関連性がうかがえる。

以上のとおり、土器構成の変化と遺跡の消長は連動している可能性が高い。本稿で抽出した画期を視野に入れながら、集落動態を再分析することが今後の重要な課題である。

7．おわりに

弥生時代から古墳時代への時代の変革期に、列島各地ではいかなる社会変化が起きたのか、その問題を解き明かすための鍵を握る地域の一つと考えられるのが、琵琶湖をとりまく近江地域である。

このような重要性を認められながら、直接的に議論される機会が少ない近江地域の考古学が直面する状況を変えようと、本稿では、特に取り扱いが難しい湖岸北半地域に関して、議論の前提となる時間軸の検討をおこなった。結果として、地域色の強い器台形土器の変遷に着眼した編年案を提示できたことは一定の成果といえるだろう。

しかしながら、周辺地域の編年案と比べた場合、本稿で用意した時期区分の目盛りは粗く、継続的な検討が求められる。特に、対象地域内の集落の変動期とも重複する可能性についてふれたⅤ期は、細分が必要である。また、土器構成が大きな変化を遂げた後のⅥ・Ⅶ・Ⅷ期は資料不足が否めず、資料が蓄積した後に、画期の再設定など、あらためて評価をおこなうべき部分もある。

依然として課題は残るが、本稿の成果を用いることで、ようやく湖岸北半地域、そして近江地域の動向やその意味を、周辺地域と比較しながら評価することが可能となる。本稿の試みは、今後、これら地域の役割を日本列島史的な枠組みの中で正しく位置づけることができた時、はじめてその意義を得ることができるのである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教官の設楽博己先生をはじめ、佐藤宏之先生、福田正宏先生、石川岳彦先生ほか、東京大学考古学研究室の先生方より多大なる御指導を賜った。また、下記の方々や機関、あるいは研究会の皆様には、本稿に関する多くの御教示を賜ったほか、資料調査に際して様々な便宜を図っていただいた。伊庭功、小野航、小竹志織、古山明日香、近藤広、瀬口眞司、高橋順之、中居和志、伴野幸一、藤崎高志、松室孝樹、宮崎雅充、宮崎幹也、滋賀県埋蔵文化財センター、高島市教育委員会、長浜市市民協働部歴史遺産課、東近江市埋蔵文化財センター、米原市教育委員会、守山市埋蔵文化財センター、近江貝塚研究会、古墳出現期土器研究会、東日本古墳確立期土器検討会（敬称略）

すべての方々のお名前を挙げることは叶わないが、御指導くださった皆様に深く感謝し、御礼申し上げる。

注

1）森岡は、守山市伊勢遺跡が活発な活動を示す「弥生時代後期中頃～後半」を「倭国のプロトタイプが近畿・東海を覆う段階」と表現し、その段階に「原倭国」という用語、概念をあてる。そして、「ヤマト王権を形成、確立した「倭国」とはあえて峻別」することで倭国の成立過程を理解しようと試みている（森岡 2015：pp.52）。新段階の近畿式銅鐸を集中的に生産した地域が、近江湖南から湖東地域に及ぶ地域と推定されることや、守山市伊勢遺跡の存在を根拠に、「原倭国」の中心部を近江を核とした北近畿とする仮説を提示し、さらに、２世紀頃に近江を核とした地域結合の強化が起こることの重大性を指摘する（森岡前掲）。

2）煩雑さを避けるため、以下では「受口甕」と呼称する。

3）現在の滋賀県米原市に含まれる旧行政区分。

4）括弧内は、小竹森の論中における表現を使用している。「庄内式期」についても同様である。慣用的な表現として筆者は理解している。

5）弥生時代や古墳時代の地域を指す際に、律令制定以後の行政区分としての意味合いをもつ「近江」という用語の使用は避けるべきだが、一般的に普及している名称として、本稿では「近江地域」や、「近江地域北部」等の語を用いてきた。対象地域を限定した以後は地理的な区分を意識した「琵琶湖沿岸北半部地域」を採用するが、煩雑なため文中では湖岸北半地域という語句を用いる。

6）土器の形式分類では、寺沢薫による方法（寺沢 1980，寺沢 1986）が各分類基準を客観的に説明していると理解して参考にした。本稿で使用する用語との対応関係は、まず、壺類、甕類、高杯類として示した器類が、寺沢の「【要素１＝機能素１】」に基づく分類とおおむね対応する。次に、広口壺、直口壺などの、おもに機能に関わる器形差に基づく器種の分類が「【要素２＝機能素２】」による分類と対応する。そして、受口甕やく字甕、有段甕といった形態的な差を大きく反映した細分が、「【要素３＝形態素１】」に基づく分類と対応する。要素３については「機能細分の想定される形式もないではないが」（寺沢 1986：pp.64）と述べられているように、器種の細分との境界を判別することは簡単ではない。「【要素４＝形態素２】」とされた視点は、本稿で扱った土器群に対しても適用可能だが、本稿が目的とする時間軸の設定という課題達成のために不可欠な視点とはいえず、必要な場合に採用するに留めた。

7）広口壺Ｄに分類した一群は、尾張平野を対象とした編年案（赤塚 1990 など）では複数形式に細分できるものを含むが、本稿の対象地域で広口壺Ｄは客体的な存在であり、細分を行った場合、その消長関係は限られた資料に大きく左右されてしまい、把握が困難である。したがって、本稿の編年案において各細分形式を採用することは適切ではないと判断し、あくまで濃尾平野との強いかかわりを示す一形式として分類するにとどめた。

8）赤塚次郎は文中で、「高杯Ａ」を「杯部に段をもつ有段高杯」として、「Ａ₁」を「口径と稜径の差が小さく、杯部が比較的浅い。円柱状から円錐へ移行する脚部をもつ」例、「Ａ₂」を「内彎杯・内彎脚をもつ高杯。口径と稜径の差が大きく、杯部が深い」例、そして「Ａ₄」を「円錐状の外反脚をもつもの。杯部は大きく外反するものが多い」例として分類している（赤塚 1990：pp.55）。異なる形式の高杯を採用する地域と接する琵琶湖沿岸地域では、高杯の口縁部の形状によってのみ、分類を行うことが非常に難しい。特に、筆者が設定したＣ・Ｄ・Ｅ類を口縁部の実測図のみから判断することは困難であり、有効な分類方法として適用しにくい。そのことが前述したとおり高杯を編年の軸とすることを避けた要因でもある。したがって、高杯の分類方法については、先行研究等で採用されてきた方法の中から、最大公約数的な分類を選択したに過ぎない。

9）器台Ｏは対象中に全形がわかる資料がなかったため、分類一覧等には参考資料として湖南地域にあたる守山市服部遺跡の例を示した。

10）寺沢薫は、器高が口径ないし裾径を大きく凌駕することなく、器高 10㎝程の小形定型化した器台を小形器台として分類し、小形丸底壺、小形丸底鉢とともに祭祀の機能をになう土器と考えている（寺沢 1986）。本稿では暫定的にこの分類基準を参考にして、「いわゆる小形器台」という用語を使用する。

11）筒状のＯ類から明瞭な屈曲部をもつＡ・Ｂ類への変化に対して、同一系統の器台が型式学的に変化した結果であるか判断することは、現状では類例も少なく簡単ではない。両者の形態的な差異は大きいが、近年の調査例でＯ類とＡ類の中間的な屈曲部をもつ器台もみられるため（沢村編 2014）、今後の資料の蓄積によっては具体的な検証が可能となるかもしれない。このような課題はあるが、前時期的なＯ類から弥生時代後期に主体的に採用されるＡ・Ｂ類へと推移したという観点は妥当であると本稿では理解した。

12）透孔の位置と脚部の屈曲度の相関を認めるならば、脚部に透孔を施す行為は器台がつくられはじめた当初、脚部を屈曲させる工程に含まれていた可能性を指摘できる。その後、屈曲度が変化した結果、透孔は慣習的に脚部上方に穿たれるだけとなったと理解できるかもしれない。しかし、他地域でこのような傾向は明瞭ではないため、対象地域において確認した器台製作と透孔の関係性を器台全般に適用することは、現状では難しい。

13）桜内遺跡 85SB2 は一括資料のなかでも良好な出土状況をもつ事例であり、土器類が住居の壁に沿って並んだような状態で出土したことが報告されている（田中編 1988）。

14）正伝寺南遺跡から出土する土器群３、６、９、10、11 は、調査報告書において「明らかに土器群６の下層から検出された土器群 11 以外はすべて、ほぼ同一層からの出土であり、出土状況から見る限り土器群３～土器群 10 までの土器群間にも大きな年代差は見出し難い」（大沼 1989：pp.16）と理解される。しかし、前項で述べた器台の型式学的な分析結果に基づき、土器型式としては、正伝寺南遺跡土器群３をほかの土器群より古い一群と判断した。なおかつ、土器群３は報告書中で「ＳＤ３の東岸から検出された一群」」（大沼 1989：pp.15）と記載されており、ＳＤ１周辺から検出されたほかの土器群６、９、10、11 とは区別して理解しても差し支えないと筆者は判断した。

15）湖岸全域を対象とした研究に関しては、本稿との分析方法の差異によって、同じ資料の解釈が異なることがあり、本稿の目的から離れた別の説明が必要となるため、本稿では扱わなかった。

16）Ａ地域とＢ地域の併行関係を明らかにするためには、第一に、Ａ地域へ搬入されたＢ地域で製作された土器Ｘを対象として直接的に比較する方法がある。ＸがＢ地域の編年上どこに位置するかを把握することで、Ｘが所属する遺構や一括遺物の時期がわかるという方法である。第二に、両地域で共通して採用される形式や類似度の高い形式に注目し、共通の変化を見出すことで間接的に併行関係を明らかにする方法である。二つの方法はどちらも、時期差を考慮しなくてはならず、本来ならば、双方の方法を実践した上で詳細な検討をおこなわなければならない。しかし、対象地域である湖岸北半地域は、その地勢的な条件を理由として、特に、第一の方法による検討が困難である。なぜなら、一見、搬入品にみえる資料も、周辺からの影響を強く受けた結果定着した形式である可能性が高く、直接的な搬入品でないことがあるためである。一方で、在地生産されたことが推定されながらも、きわめて他地域の土器に類似するうえ、共通の変遷を辿る形式があることも対象地域の特徴である。特に、濃尾平野で採用される形式は、湖岸北半地域で頻繁にみることができ、編年の指標となりやすいことが知られている。したがって、本稿では、濃尾平野の土器編年案との対比に基づく後者の方法を中心的に採りながら、必要に応じて搬入品を用いた直接的な比較をおこなう。湖岸北半地域からの距離が濃尾平野に比べて遠い、大和や河内地域との併行関係を探るには、互いの地域で共通する形式であっても受容する時期に差が生じやすいことが予想されるため、前者の方法による直接的な対比が求められる。しかしながら、湖岸北半地域の資料不足により、説明が不十分な点は否めない。この問題に関しては今後も良好な資料を補うことで解決を目指したい。

17）赤塚が、杯部口縁が大きく外反することや、杯部の加飾が消極的であることを特徴として設定した、高杯Ｄを指す（赤塚 2002：pp.26）。

18）内彎志向を持つデザインの八王子型高杯とされる、高杯Ｅを指す（赤塚前掲）。

19）赤塚次郎が「Ｓ字状口縁台付甕」としたもののうち、「口縁端部に明瞭な面をもつ。刺突文は省略する。（Ｓ字甕Ｂ類）」としたもの（赤塚 1990：pp.54）。

20）赤塚が「Ｓ字状口縁台付甕」としたもののうち、「口縁部の複雑な屈曲は外方へ大きく拡張する。頸部調整技法をもつ。（Ｓ字甕Ｃ類）」としたもの（赤塚前掲）。

21）越前塚ＳＸ－ 55 から出土する土器には、出土状況に基いて供献土器として報告される一群がある。報告書によれば、北辺溝から受口鉢Ｂ類（図 20 － 20）と有段口縁鉢Ａ類（同図－ 21）が、南辺溝から広口壺Ｅ類（図 12 － 20）が周溝底部で正置された状態で出土したと記載される。また有段高杯（図 18 － 21）も同様に周溝底部から出土したと記載され、報告書の写真図版ではその位置は周溝北東角として報告される。さらに、器台Ｇ類（図 10 － 16）と椀形高杯Ｃ１（図 18 － 22）が転倒した状態でそれぞれ東辺溝と西辺溝の周溝底部から出土したとされる。本稿では上記の土器を、越前塚ＳＸ－ 55 に伴う一括性が比較的に高い土器群として扱う。なお、報告書掲載の実測図にはＳＸ－ 55 出土遺物のなかに、甕Ｅ２類や、赤塚が「山陰系口縁の特色

をもつ」として分類したＳ字甕Ｃ６類（赤塚 1990：pp.54）が含まれるが、出土状況等について記載がなく不明瞭な部分も多いため、上記の土器群には含めないこととした。ＳＸ－55 の周辺には、ＳＸ－55 の一部を切って隣接する別の方形周溝状遺構ＳＸ－56 が存在する（宮成 1988：pp.54）。

引用文献

赤塚次郎　1990 「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 10，愛知県埋蔵文化財センター，50-132

赤塚次郎　1994 「松河戸様式の設定」赤塚次郎編『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 48，愛知県埋蔵文化財センター，84-103

赤塚次郎　2002 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」樋上昇編『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 92，愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，25-48

安達厚三・木下正史　1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60(2): 1-30

市村慎太郎　2019 「中河内からみた庄内・布留式における列島各地との併行関係の整理（1）」『古墳出現期土器研究』6:41-50

植田文雄　1994a 「湖東北域の近江系について」『庄内式土器研究』6: 1-24

植田文雄　1994b 「古墳時代土器論：近江の土師器、その変遷と画期」『滋賀考古』12: 1-45

大沼芳幸　1990 「北地区」『正伝寺南遺跡（本文編）』一般国道 161 号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書 1，滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会，9-16

大橋信弥・山崎秀二編　1986 『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ：滋賀県守山市服部町所在』建設省琵琶湖工事事務所・滋賀県教育委員会

兼康保明　1990 「近江地域」寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年：近畿編Ⅱ』木耳社，321-419

小竹森直子　1988 「近江の地域色の再検討：弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態」『紀要　第 1 号』滋賀県文化財保護協会，13-28

小竹森直子　1993 「弥生時代から古墳時代初頭土器群について」清水尚・小竹森直子・大崎哲人・畑中英二・出渕順子・中村ますみ編『針江川北（Ⅱ）遺跡・吉武城遺跡（本文編）』一般国道 161 号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町遺跡発掘調査報告書 5，滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・滋賀県文化財保護協会，232-241

古代学研究会編　2016 『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房

近藤　広　1992 「土器からみた湖南的要素と湖東的要素：弥生時代後期後葉から古墳時代前期を中心に」『滋賀考古』7:29-40

近藤　広　2001 「弥生後期における受口状口縁土器の様相：近江の地域区分と他地域への影響」西田弘先生米寿記念論集刊行会編『近江の考古と歴史：西田弘先生米寿記念論集』真陽社，91-100

佐原　真　1960 「弥生式時代」中村直勝編『彦根市史　上冊』彦根市役所，88-108

沢村治郎編　2014 『物部遺跡第 26 次調査報告書』長浜市埋蔵文化財調査資料 145，長浜市教育委員会

滋賀県教育委員会　1976 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅲ－Ⅱ』滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

1992 『針江北遺跡･針江川北遺跡（Ⅰ）』一般国道 161 号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町遺跡発掘調査報告書 4

関川尚功　1976 「畿内地方の古式土師器」奈良県立橿原考古学研究所編『纒向』奈良県桜井市教育委員会，460-500

高野陽子　2003 「出土遺物の検討」奥村清一郎・竹原一彦・森島康雄・伊賀高弘・高野陽子編『佐山遺跡』京都府遺跡調査報告書 33，京都府埋蔵文化財調査研究センター，97-135

武末純一・伊庭功・辻川哲朗・杉山拓己　2011 「金海會峴里貝塚出土の近江系土器」『古代文化』63(2):101-112

田嶋明人　2013 「4 期の画期をめぐって」『東生』2: 1-15

坪井清足　1956 『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』岡山縣高島遺蹟調査委員會

寺沢　薫　1980 「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」奈良県立橿原考古学研究所編『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書 34，奈良県教育員会，155-196

寺沢　薫　1986 「古式土師器の形式分類」奈良県立橿原考古学研究所編『矢部遺跡』奈良県教育委員会，64-84

戸塚洋輔　2016 「近江地域」古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』101-130，六一書房

中居和志　2010 「古墳出現前後の近江地域:土器編年を中心に」『立命館大学考古学論集Ⅴ』立命館大学考古学論集刊行会，125-148

中西常雄　1979 「大津市北郊地域の弥生・土師の研究：北大津遺跡出土土器の編年的研究より」中西常雄編『北大津の変貌：弥生時代から古墳時代へ』1-23

中西常雄　1985 「近江における甕形土器の動向：庄内期を中心にして」『考古学研究』32(1):61-80

西村　歩　2008 「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」香芝市二上山博物館編『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 8　シンポジウム『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』資料集』1-42，香芝市教育委員会

伴野幸一　2000 「湖南地域における弥生集落の動向：野洲川流域の弥生時代中期後半から後期の集落をめぐって」『みずほ』33: 60-75

伴野幸一　2003 「滋賀県野洲川流域の遺跡群と受口状口縁甕の変遷：近江における古墳出現期の土器と年代」『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』大阪府文化財センター，113-122

伴野幸一　2006 「近江地域：野洲川流域を中心に」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター，49-66

早野浩二　2011 「土師器の編年④東海」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学 1：古墳時代史の枠組み』同成社，95-108

早野浩二　2013 「「庄内式」の成立、「漆町 4 群」の画期と東海の土器編年」『東生』2:23-28

松室孝樹　1998 「姉川左岸地域における遺跡の動態：弥生時代後期から古墳時代にかけて」『滋賀考古』19: 1-23

宮崎幹也　1994 「黒田遺跡を取り巻く土器編年」『黒田遺跡 3』近江町文化財調査報告書 17，近江町教育委員会，58-86

宮成良佐　1988 「遺構及び出土遺物」『越前塚遺跡発掘調査報告書』長浜市埋蔵文化財調査資料 5，長浜市教育委員会，25-58

森岡秀人　2015 「倭国成立過程における『原倭国』の形成：近江の果たした役割とヤマトへの収斂」『纒向学研究センター研究紀要　纒向学研究』3:39-55

森岡秀人・西村歩編　2006 『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター

山下優介　2018 「弥生時代後期における甕形土器の採用比率とその背景:滋賀県を中心として」『東京大学考古学研究室研究紀要』31:61-84

若杉智宏・田中元浩　2015 「和田廃寺 SD145 出土古式土師器について」『奈良文化財研究所紀要 2015』国立文化財機構奈良文化財研究所，116-122

［編年に使用した報告書］

1．北村　彰　1977 『昭和 51 年度　南市東遺跡発掘調査概報』安曇川町教育委員会

2．中江彰編　1979 『南市東遺跡発掘調査概報』安曇川町教育委員会

3．大沼芳幸・清水尚編　1990 『正伝寺南遺跡（本文編)』一般国道 161 号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書 1，滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

4．滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会 1992 『針江北遺跡・針江川北遺跡（Ⅰ）（本文編)』一般国道 161 号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町遺跡発掘調査報告書 4

5．清水尚・小竹森直子・大崎哲人・畑中英二・出渕順子・中村ますみ編　1993 『針江川北（Ⅱ）遺跡・吉武城遺跡（本文編)』一般国道 161 号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町遺跡発掘調査報告書 5，滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

6．兼康保明・堀内宏司編　1978 『森浜遺跡発掘調査報告書〈本文編〉』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会

7．葛原秀雄　2007 『弘川常磐遺跡：図版編』高島市文化財調査報告書 8，高島市教育委員会

8．兼康保明編　1981 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅷ－３』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会

9．横田洋三編　2000 『法光寺遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 27(1)，滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

10．田中勝弘編　1989 『伊香郡余呉町桜内遺跡』北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書 11，滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

11．森口訓男編　1988 『十里町遺跡・鴨田遺跡調査』長浜市教育委員会

12．浜崎悟司・稲垣正宏　1988 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅤ－１』滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

13．宮成良佐編　1988 『越前塚遺跡発掘調査報告書』長浜市埋蔵文化財調査資料 5，長浜市教育委員会

14．森口訓男編　1990 『越前塚遺跡Ⅲ・口分田北遺跡Ⅰ・Ⅱ・宮司遺跡Ⅳ・新庄馬場遺跡Ⅰ・大辰巳遺跡Ⅲ』長浜市埋蔵文化財調査資料 6，長浜市教育委員会

15．丸山雄二編　1995 『大塚遺跡』長浜市埋蔵文化財調査資料 12

16．丸山雄二編　1996 『大塚遺跡Ⅱ』長浜市埋蔵文化財調査資料 14

17．仲川　靖編　1989 『柿田遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

18．坂本正裕編　1996 『墓立遺跡Ⅱ』長浜市埋蔵文化財調査資料 15，長浜市教育委員会

19．稲葉隆宜編　1996 『北郷里小遺跡・上寺地遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 23(1)，滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

20．松室孝樹編　1993 『堀部西・丸岡塚遺跡、春近遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 20(9)，滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・滋賀県文化財保護協会

21．伊藤　潔編　1999 『大辰巳遺跡発掘調査報告書：第７次調査』滋賀県長浜市埋蔵文化財調査資料 31

22．宮崎幹也編　1990 『法勝寺遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅦ－１

23．宮崎幹也編　1994 『黒田遺跡３』近江町文化財調査報告書 17

挿図出典

図１　森岡・西村編 2006

図２　地理院地図（https://maps.gsi.go.jp/）をもとに筆者作成

図３　各調査報告書をもとに筆者作成

図４～６　各調査報告書をもとに筆者作成

図７～９　筆者作成

図 10 ～ 20　各調査報告書をもとに筆者作成

表１～５　筆者作成

Chronology of Pottery Styles from the Late Yayoi to the Early Kofun Period along the Northern Shore of Lake Biwa

-Focusing on Vessel Stand Pottery-

Yusuke YAMASHITA

Distinctive archaeological phenomena from the late Yayoi period to the early Kofun period are concentrated along the shore of Lake Biwa (the Omi area). Examining the social changes that occurred at that time is thus not only a question of regional history, but a serious factor in understanding the background of this changing period in the Japanese archipelago. However, recent studies are still unclear about the nature of the archaeological sites within the Omi area and the regional interaction between it and surrounding areas. In particular, the pottery chronology of the northern shore of Lake Biwa, an important point of connection with the southern shore (the center of the distinctive phenomena), has not been sufficiently studied. One factor that complicates study of a pottery chronology in this area is the lack of a form of pottery used to judge the period. However, by focusing on the vessel stand pottery considered characteristic of the Omi area, a pottery chronology of the northern Omi region can be reconsidered.

This paper presents a pottery chronology for accurately assessing the significance of archaeological phenomena in the Omi area compared to its surroundings. The study's analysis divided the target period into nine phases based on typological changes in vessel stand pottery, and clarified the pottery composition in each period. Until now, it has been necessary to compare excavated pottery with a representative pottery chronology from another area to determine the period in the target area. This paper's results make it possible to determine the specific period based on indicators for the northern Omi area. In addition, the epoch between phases V and VI, when significant changes in pottery composition were recognized, may be linked to the surrounding areas. Future research must determine how to evaluate the change.